

父さん、どうか手傳つて鬻を討つて下さい。」

「左様か。お前は彼奴等を知らんだらうが、なかなか尋常な奴ぢやない。豚のやうなと色の黒いのは左程でもないが、あの猿面の悟空といふ奴は大した神通力のある奴ぢや——よしよし、俺が自身で出かけて退治してやらう。」

當の黃獅をはじめ白獅、紅獅、綠獅、紫獅、褐獅、藍獅などの七人の孫たちを引連れ、威風凜々として進發する。

玉華城では、突然辰巳の方かな腥さい風が吹いて來たので、驚いて天を仰ぎ見ると、遙か彼方に妖怪の大軍が押し寄せて來るのが見えたから、國王はじめ氣が氣ではありません。しかし、悟空は平氣なもの。

「陛下御心配なさいませぬ。あれは黃獅の奴が、祖父の九靈を加勢に頼んで來たのでせうが、あんな老ぼれは何でもありません。我々三人で行つて、取ツつかまへて來ます。」

八戒悟淨とともに、雲に乗つて城外に走り出で、來れ討たんと待ち構へてゐます。

いきり立つて來た先鋒の黃獅は、三人の怨敵を認めたが、今度は九靈といふ後楯があるから氣が強い。

「やい、豚に猿に黒ん坊！ 先刻は勝を譲つてやつたが、もう貴様等に負けはせんぞ。おとなしく降參致すか、但しは尋常に勝負するか、二つに一つの返答致せ。」

「なにを猪口才な盜ッ人奴。この八戒が熊手を喰はぬうち、消えて無くなれ、カツカツカツカツ泥ライオン！」

雙方得手勝手な臺詞を列べ立てて、喧嘩をおつ始める。かくと見た六人の孫獅子、各々得物を揮つて駆けて來たので、これは悟空悟淨が引き受け、ここに七ライオン三坊主の大亂闘が展開されました。

九靈元聖は後陣に在つて、暫く戦ひの有様を眺めてゐたが、やがて黒雲に乗つてそうつと城内に飛んで行き、矢庭に國王父子と三藏を引ツ攫つて、また此處へ歸つて來た。しかし三人は夢中で戦つてゐるので、誰もこれに氣が付きません。

三 老妖九頭獅子

元來九靈は九頭獅子の精だから、五つの口で五人衝へて來ても、まだ四つ餘つてゐる。使はずに空けて置くのも無駄なこと、彼か此かと物色したが、悟空と悟淨は輕敏で攫ひさうがないので、一番鈍重な八戒に見當を付け、さつと飛降りて衝ひ上げるや、残りの口で大音聲——

「孫ども引揚げろツ。この通り六人を捕虜にしたぞ。」
悟空驚いて天上を見れば件の有様。さては老ぼれに謀られたるよなと、急に身外身の法を使ひ、一掴みの毛を數百の小悟空に變じて、孫獅子等をおつ取り圍み、たうとう黃獅を打殺し、残りの

六人を生捕りにして引揚げて来た。

城内の文武百官は、蒼くなつて大騒ぎの最中です。

「大變です。陛下と殿下と和尚様が妖怪に攫はれました。どうぞ早くいらしつて救つて下さい。」
「さう心配なさるな。こつちも彼奴の孫を六人人質に取つてあるから、滅多に陛下方を殺すやうなことはありませんまい。これから寛り支度をして、必ず皆様を救つて参ります。」

先づ六人の捕虜を鐵の牢に押し籠め、充分腹拵へをしてから、悟淨とともに盤桓洞にと馳せ向ふ。九靈は二人が逆襲して来たといふ歩哨の報告を受け、門外に待ち伏せして難なくばかりと銜へ捕つたが、これは寧ろ悟空等の思ふ壺、かうして捕まつて置いて、味方を救ひ出さうといふ計略なのです。

九靈はそんなことは知らないから、得意満面。

「はははは、小わつば奴、俺様に遇つちや敵ひつこはあるめえ——したがあの孫どもをどう致した、白狀致せツ、いはぬとかうだぞ。」

柳の鞭でびしりびしり二人の頭をひつ叩いたが、いづれも石頭の法を使つてゐるから、平氣の平左で何處を風が吹くといつた顔。九靈も呆れて、

「まあいいわ。今日は大分草臥れたから、明日ゆつくり懲らしめてやらう。」

と、二人を嚴重に縛つた上見張の番兵を付け、腰を叩き叩き臥戸に入りました

その夜半、悟空は豫ての計畫通り、繩抜けの法を行ひ、皆を助け出さうとして居るところを、うっかり番兵に見付けられた。がやがや騒ぐ物音に九靈おつ取り刀で出て来たので、悟空はまた捕まつてはこと面倒と、一旦洞外に逃れ出る。何しろ相手が九つも頭のあるシレ者で自分の本陣に居るのに、こつちは寡軍敵城に入つてゐるのだから、仕事は容易ぢやありません。

そこへちやうど来かかつたのはこの近邊の氏神、悟空を認めて呼びかけました。

「貴方は唐の悟空さんでせう。昨日からこの界限は大分騒々しいが、どうかなすつたんですか。」

「いや實は、玉華州の王様や俺の師匠などを攫はれて弱つてゐるところだ。一體あの九靈といふ爺いは何者だね？」

「あれはもと救苦天尊が乗つてゐられた獅子ですが、數年前下界に降つて妖怪になつたのです。

一筋縄ではいかぬ奴ですから、天尊にお願ひになるのが一番ですよ。」

「さうか、いいことを教へてくれた。さういはれると、救苦天が九頭の獅子に乗つてゐられたのを見た覚えがある。ちやこれから行つてお頼みしよう。」

觔斗雲に乗つて東天の妙巖宮に天尊を訪れ、前日來の一件を事細かに訴へ出た。天尊は獅子が居るものとはかり思つてゐたから、驚いて獅子小屋に行つて見ると、果して藻抜けの殻で、番人の男は眠むさうな眼をこすりながら、うろろして居ります。

「これこれ、お前は獅子の番をしてゐながら、どう致したのぢや。」

「これは天尊様、何ともはや申譯も御座いません。實は先日御殿で盗み酒を致しましたところが、そのまま何も知らずに今日まで酔倒れてゐた間に、逃げられたものと存じます。どうか御勘辨なすつて下さいませ。」

酒で十圓札どころか、百圓札をバツバツと吹つ飛ばすのは、カフェーなどにも澤山居るが、此奴は本物の獅子を逃がしをつた。

「怪しからん奴ぢや。あの酒は太上老君からの贈物で、飲めば五六日は醒めない銘酒ぢや。これから捕まへに參るから、一緒について參れ。」

悟空と三人で東天門を出で、下界に向はれました。

程なく三人は竹節山に到着。誘き出し役の悟空が洞門をがたつかせながら、散々に悪口を列べ立てると、九靈は怒氣滿面、九つの口を張り開いて猛烈躍り出した。天尊きつとこれを睨み、

「これ九頭、わしが參つてゐるのに、氣が付かないのかッ。」

御聲も鋭く叱り付ければ、忽ちへたへたと地上に蹲まり、まるで他愛がありません。獅子番の男はその側に駈寄つて、

「こん畜生、貴様が黙つて逃げやがつたので、おいらウンと叱られたぞ。」

ピシヤピシヤ拳骨で殴り付け、持つて來た錦の鞍をかけると、天尊はひらりこれに跨り給ひ、

悟空の拜禮裡に東天に歸らせ給ふ。

悟空は直ちに洞内に入つて一同を助け出し、小化物を打殺した上、打揃つて玉華城に引揚げる。案じてゐた官民の喜びはもとより、國王父子は一行を命の親とあがめて、下にも置かぬ歡待ぶりに、さすがの八戒も胃弱を起すくらゐ。なほ國王は悟空の進言により、捕虜になつてゐた獅子どもの皮を剥ぎ、肉は悉く城内に配給しましたので、人民一同初物のライオン鍋を賞味するこ

とが出来、自然一行の徳望は高まるばかりです。

そのうち例の三武器も鑄上つたので、三人からそれぞれ王子達に祕術を傳へ、一月あまり滞在した後、引止めるのを振切つて進發、再び旅路に上りました。

四 佛體は油泥棒

次で差しかかつたのは金平府と呼ぶ大きな町、一行は慈雲寺といふ寺に宿を求めて、ここに泊することとなつた。折しもちやうど盂蘭盆會に當り、町家では皆燈籠を掲げ、迎ひ火を焚き、往來は見物や佛參の人で押返すやうな賑ひです。

殊に土地の名所になつてゐる金燈橋の大燈籠は、他所では見られぬ壯觀と稱されてゐます。

三藏等は慈雲寺の和尚にさそはれ、話の種にもと、打連れて見物に出かけましたが、まつたく噂に聞くより見事なもの。高さ五丈に餘る三基の燈籠は、内側を瑠璃板で張り詰め、周圍に燦爛

たる金糸を繞らし、皎々たる光は満月を欺き、なんともいへぬいい香氣が四方に漂つてゐます。八戒は鼻びくびく。

「ほう、これはとてもいい匂ひだ——慈雲寺の和尚さん、どうして、あの油はこんなに匂ふんです？」

「あれは御存じないでせうが、他國にはない値の高い油です。一斤が三十二兩で、三つの燈籠に千五百斤四萬八千兩といふ莫大の油を費ふんですよ。」

「それはまた途方もない不經濟な話だ。たつた一晚で、どうしてそんなに澤山の油が要るんですか。」

「それですよ、まあ見てゐて御覽なさい。もう暫くすると何處からか三つの佛體が現れて、それと同時に燈籠の火が暗くなり、油はすっかり無くなつてしまひますから……」

「へーい、ちやその佛が油を甜めてしまふんでせう。」

「さうかも知れませんがね。何にしてもこの燈籠を上げないと、その年はきつと凶作ですから、仕方なく油問屋が犠牲になつて、毎年々々この燈籠を納めるんです。」

案内の和尚とこんな話をしてゐるうち、遠くの方からドーンといふ風の音。數萬の見物人はこれを聞くや、逃げる逃げると喚き騒ぎ、先きを争つて八方へ逃げ去つてしまつた。

悟空たちも何事か判らないけれども、兎に角ここを立ち去らうと申しましたが、三藏はいつか

な背きません。

「お前たちは間違つたことをいふ。わしは平常から佛を拜まうと心がけてゐるのだから、ここにゐてお待ち申してゐる。」

と、却つて橋の上に進み出た時、風は一層強くなり、その風の中から會體の知れない三個の佛體が現はれた。悟空はくりくり眼を一層大きくして凝視すると、確かに怪しい奴です。

「お師匠様、あれは妖怪です。早くこつちへおいでなさい。」

と呼びかけるが否や、燈籠の火が一時に暗くなり、空中からよろり太い手が出て、三藏の首筋をつかみ上げ、何處へか飛去つてしまつた。

一同の驚愕は、驚に油揚を攫はれたところの騒ぎぢやありません。ただあれよあれよと狼狽へるばかりでしたが、悟空はきつと身繕ひして立上りました。

「みんなは寺に歸つて荷物と馬の番をしてくれ、俺は追ひかけて行つて何とかしてくる……」

いふが早いか筋斗雲に飛乗り、腥さ風の後をつけて、東の方へと眞つしぐら。

妖怪もこれに氣が付いたか、煙幕戦術を用ひ、眞黒な雲を空一面に吐き出したので、さすがの悟空も濃霧に包まれた飛行機同様。仕方がないから或る山の上に着陸し、何としたものかと思案變首の所へ、折よく地方巡察の役人が通りかかつた。

「あなたは唐の齊天大聖では御座いませんか、こんな山の中で何を考へていらつしやるのです？」

「實は三人の妖怪に師匠を攫はれたので、ここまで追ひかけて来たが、見失つてしまつて、弱つてゐるところだ。」

「それぢや、何でせう、この山續きの青龍山依英洞に住む辟寒、辟暑、辟塵の魔王兄弟でせう。」

「ふう、まるで別荘地みたいな名の奴等だな。一體奴等は何者だね。」

「素姓はよく判りませんが、油が大の好物で、毎年孟蘭盆には佛體に化けて金平府の人民をだまし、一年分の食料を捲上げてゐるのです。早く行つて救つて上げないと、お師匠様が天獄羅にされてしまいますよ。」

「揚げられてしまつちや大變だ——では行つて来る、左様なら。」

急いで依英洞に駈付け、門外から破鐘のやうな聲で罵る。

「おい師匠を返せ！ 返さぬと盛殺しにしてしまふぞッ。」

この時、洞内の三魔王は、三藏の料理に取かからうとしてゐたが、この聲を聞き付けて三藏に聞きました。

「こら坊主！ いま表で騒いでゐるのは、貴様の何だッ。」

「あれは齋天大聖孫悟空と申します弟子で御座います。私は天竺へ經文を授かりに參る者で御座いますから、どうぞ命をお助け下さいませ。」

「フーム、その悟空といふのは、いつぞや天界を騒がせたとか噂のあつた奴ぢやな。まだ外にも

從者が居るのか、眞直に申せ、命を助けて遣はすから……」

「はい、外に天蓬元帅猪八戒と、捲籠大將沙悟淨と申す二人も居ります。」

三藏は成るだけ偉さうにいつて、相手を恐がらせようと致しましたが、三魔王はびくともしな

いばかりか、却つて大喜びです。

「はははは、それはトンだ景物がやつて来てくれたわい——兎に角この坊主は縛り付けて置いて、その三人を捕まへて来た上で、一緒に料理して喰はう。猿や豚の天獄羅も變つてゐてオツだらうぜ。」

三人揃つて表に躍り出し、眞つ赤になつて力み返つてゐる悟空に嘲罵を浴せます。

「ナーンだ、貴様が評判に聞いた悟空か。まるで、猿芝居にでも出るやうなチツボケな奴ぢやないか——一體お前は、何が貰ひたくてそこに立つてるんだい？」

「おのれ失禮な油泥棒め。問答無益ぢやッ。」

ビュービュー如意棒を振廻して来るのを、三魔王は斧と大刀と槍で立合ひ、火花を散らして戦ふこと百數十合。そのうち後陣に控へた魔王の家來が加勢に出て、悟空を取圍んだので、さすがに衆寡敵せず、雲に乗つて一旦慈雲寺に引返ししました。

急報に接した八戒と悟淨は、悟空と共に再び依英洞に押しかけたが、斯くあるべしと豫期してゐた三魔王は、更に數千の家來を繰出して邀撃したので、八戒悟淨の兩人、腑甲斐なくも遂に生

捕られてしまった。

悟空は口惜しくてならぬが、唯一人では何とも致し方がない。かなはぬ時の神頼み、近頃度々天上界へ無心に行くので、チトきまりがよくないけれども、もう卒業も間近のことだし、親父が何とか始末してくれるだらうと見込を付け、今度は直接に天上玉帝の許に願ひ出ました。

五 四木星神の應援

玉帝願のおもむきを聞かれて應援を命ぜられたのは、星辰二十八宿中の猛者なる角木蛟、斗木獬、奎木狼、井木犴の四木星神です。悟空が案内して青龍山に到り、例によつて滅茶苦茶に罵詈譏を浴せると、三魔王は大勢の家來を連れて、勢鋭く躍り出しましたが、四木星の姿を見て一縮み。

「やあ、我々の苦が手が来た。」

と本相の犀に變つて一目散に逃げ出す。悟空は角木蛟、井木犴とともに、逃がさじと疾風の勢ひで追ひかけて行く。

残つた斗木獬と奎木狼は、小化物どもを谷間へ追詰めて鑿殺しにし、洞内から救ひ出した三蔵等を慈雲寺に送り返した上、すぐまた悟空の應援に出かけます。應援隊も竝大抵な骨折ちやありません。

間もなく西海の空に来て見ると、海邊の斷崖の上に、悟空が眼をギョロつかせながら、頭張つてゐます。

「大聖、今三蔵法師たちを救ひ出して來ましたが、あの妖怪はどうしました？」

「有難う有難う——彼奴等が海の中に逃げ込んだので、井角二星が追ひかけて行きました。私も行つて來ますから、どうか此處で待つて下さい。」

ザンプとばかり飛込み、浪切りの法を使つて、海底へ行つて見れば、追つ詰められた三妖は死に物狂ひになつて合戦の最中。そこへ悟空までやつて來たので、驚いて再び崖へ逃上らうとするのを、奎斗二星が待構へてゐてこれを挟み撃ちにし、たうとう三疋とも打殺してしまひました。

悟空は犀の角を取つて、そのうちの四本を記念として四木星へ、残り二本を慈雲寺と金平府知事に贈りましたが、何しろ犀角といへば稀代の珍薬ですから、いづれも大喜びです。妖怪全滅と聞いた府民は、一行を救世の生神様と崇め、競うて、慈雲寺へ禮拜に來るといふ有様。中にも二百四十軒の油問屋では、これから毎年數萬兩の損をせず済むのも、皆和尚様方のお蔭だとあつて、一日宛代る代る接待するやうに申合せ、何としても放してくれません。

三蔵は心ならずも、一ヶ月餘りここに滞留しましたが、ある晩ひそかに、悟空を招んで、相談をかけました。

「悟空や、わし達は引留められるままに、使々ところなところで暮してゐては、何時天竺に行き

着けるか判らない。仕方がないから今夜コツソリ抜け出して、旅立たうと思ふが、どうちやらうの。」

「ハイ、私もとうからさう思つて居りました。では早速支度致しませう——オイ八戒々々、早く起きて馬を引き立てて来てくれ。」

八戒は寢惚け眼をこすりこすり起きて来たが、この話を聞いて大不平です。

「一體どうしたといふんだ。まだやつと三十軒ばかりの御馳走にしかなつちや居ないぜ。何もこんな早く出かけて、わざわざ飢い思ひをしなくたつていいぢやないか。」

「何だと、この阿呆奴。いふことを肯かないんなら、如意棒でブン殴つてやるぞツ。」

「アア、御免だ御免だ。行くよ、行きますよ。」

不承々々に馬の支度をして、四人コソコソ夜逃と出かける。借金を拂ひ兼ねてなら鬼に角、御馳走が食ひ餘つての夜逃げは、八戒でなくともチト變です。

天竺二人王女

一 荒園に泣く姫

金平府を立つてから半ヶ月ばかりで、舍衛國の布金禪寺といふ大きな寺に宿を求めた。

この寺は、もと給孤獨園寺といつたが、信心深い村の長者が、釋迦如來をお招きして、經文の講義を聞く折に、地上一面黄金を布いたところから、布金寺と名を改め、寺の後には釋迦のために求めた祇園があるといふ由緒の深い禪寺。住職は百歳にも餘るかと思ゆる、白い眉の、柔和な相をした老僧で、三藏が唐からはるばる經を求めに来た由を聞き、心から感に入つた様子で、いろいろと歡待致します。

ともに佛の道にいそむ老住持と三藏は、自然話はずんで、夜遅くまで一室で物語をしてゐましたが、三藏はふと庭の彼方から、物悲しい泣聲が傳はつて来るのを聞き付けました。

「お住持様、あの泣き聲は何者で御座いませう。あなたにはお聞えになりませんか。」

問はれて老僧は、少時沈吟してゐましたが、やがて歎息しながら、

「あれは實に可哀さうな女なのです。外ならぬ貴僧のことゆゑ、お話し致しませう。まあお聞き

なすつて下さい。」

と前置きして、女の身の上につき長物語を始めた。

「ちやうど去年の今月今夜のことでした。愚僧が縁に出て月を眺めて居りますと、祇園の方に當り、人の泣き聲が聞えます。不思議に思つて行つて見たところが、若い女が打倒れて居るではありませんか。驚いて譯を聞きますと、女は天竺國王の姫君で、その晩御殿で月を賞してゐるうち、突然吹いて來た風に攫はれて、空に捲上げられ、フト氣が付いた時は、見も知らぬこの草原に捨てられて居るので、餘りの恐さ悲しさに泣きくづれてゐたのだとの話です。無論愚僧はいたはつて連れて參りましたが、寺の中とは言ひ條、若い女を置いては何かの間違ひが起らぬとも限りません。仕方なく和尚どもには、愚僧の法力によつて捕まへた妖怪だと偽り、一室に閉ぢ籠めてその夜を過させましたが、さて翌朝になると、不思議とも何ともいひやうのないことが起つたので御座います。」

老僧はここまで話してから、氣を落着けるやうに、グツと唾を呑み込んでまた語を續ける。

「それはかうなのです。翌朝このおもむきを奏上するために、早速參内いたしますと、驚いたことには、前夜の女と年恰好、顔かたち、全く瓜二つな姫君が、宮中にも居られるのです。さては助けた女が怪しいと思ひましたから、何事も申上げずにそのまま寺に歸つて、それとなく宮中の様子を聞いて見ましたが、少しも違つたことは御座いません。愚僧も眞偽を判じ兼ねるまま、

その後、ズーツと食を與へて、早今日で滿一年留め置きましたが、女も利口者で、晝の内は譯の判らぬ讒語をいつては妖魔の風を装ひ、夜人の靜まつた頃になると、兩親のことを思ひ出して、あのやうに泣くので御座います——貴僧は年こそ若いですが、ここまでおいでになる間にでも、永年の修行を積まれた方ですから、何とか法力をもちまして、いづれが眞か偽かを、お見現はし下さる譯には行きますまいか。何せ相手は雲上人のこととて、愚僧も一年の間、全く困り抜いてゐるので御座います。」

聞けば如何にも奇怪至極な話。正を助け悪を矯める佛家の身として、このまま見捨てては置けない事件ですから、三藏も一肌脱がすには居られません。

「宜しう御座います。一緒に參つた弟子に悟空と申すのが居りますが、なかなか心利いた者で御座いますから、彼と相談致しまして、きつと黑白を見分けることに致しませう。では今晚はこれで失禮致します。」

自分たちの部屋に歸つて、悟空と明日の手筈を協議した上、寢に就きました。

*

翌朝三藏等は早起きをして寺を出立し、一旦城内の旅館に落着きましたが、町の往還は非常な賑はひで、何か事ありげな様子です。

「御亭主、大變町が賑はつてゐますが、お祭りでもあるのですか。」

「イエエ。あれは今日城内の大通りで、國王のお姫様が天婚の法により、お婿様を定められるといふので、それを見物に行くための人出ですよ。」

「ホホウ、一體その天婚の法とやらは、どんなことをするのですか？」

「天婚ですか、それはかうなんです。お姫様といふのは、國王の一粒種で、今年二十歳になられますが、なかなかいいお婿様が見付からないのです。で、今日町の大通りの櫓の上から、お姫様自身が直々手毬を投げて、それに當つた人を婿になさうといふ譯で、あの見物に行く若い男たちは、みんな毬をぶつけられて、一足飛びにお世嗣にならうといふ野心があつて押かけるのですよ。あなた方も暇なら行つて御覽なさいませ。萬一その毬にあたりでもしたら、それこそ百萬圓の寶くじに當るどころの果報ぢやありませんぜ。」

全くその通り。若し銀座の四辻で、チョツとした物持の娘ぐらゐるでも、天婚で婿選びをやるといふんなら、モダン・ボーイが雲集して、人死にが出来るほど押返すことせう。

問題になつてゐる王女が見られる譯ですから、三藏は勧めに従つて見物に行くことにしました。野心満々たる八戒は、しきりに同行を乞ひましたが、叱り付けて悟淨と二人旅館に残し置き、悟空を伴つて大通りへ行つて見ますと、果して櫓の周圍に數萬の人が群がり、中にも面麴連が、ウウヨ首を長くして毬を投げるのを待受けてゐます。

二 天授の花婿様

もともとこの王女は、この附近の山中に住む妖怪の精で、前年眞の王女を攫つて布金寺の祇園に捨て、自分が王女に成りすまして居たのですが、豫て三藏がこの國を通るのを知り、その童貞を奪つて長壽を得ようとしてゐたのですから、紛々たるモ・ポには眼もくれません。多數の官女を従へ、殊勝らしく香など焚いて待つてゐましたが、やがて三藏が通りかかつたのを見付けるや、立上つて毬を投げ付けると、コントロール過たず、發止とばかり三藏の帽子に命中した。

俺が俺がと、玉の輿を目當てに集まつた連中は、選りも選つて旅の和尚にお姫様を占められることになつたので、アツと一時に發した失望の歎息は町家の戸障子を揺がすばかり。櫓の上からは、官女がバラバラと降りて來て、

「三國一の花婿様、さあさあ、お姫様のお側へいらつしやいませ。」

と、袖を引張ります。三藏は如何に王女の眞偽鑑定に來たのだとはいへ、添臥しまでせねばならぬとあつては、弱らざるを得ません。

「悟空、困つたことになつた。どうしたものだらう。」

「大丈夫ですから、王女と御一緒に宮中へいらつしやいませ。後で宿へお使を下されば、我々が参内してきつと何とか致します。」

三藏は仕方なく悟空と別れ、櫓の下に参りますと、待兼ねてゐた王女はニコニコして三藏の手をとり、御車に合乗りして宮中に歸られる。當てが外れたモ・ボ連は、指を銜へて羨ましさうに眺めてゐるばかりです。

王女はイソイツとして國王の許へ参り、三藏を紹介しました。

「父さま、こちらが私のハズになつて下さる方ですのよ。どうぞ一日も早く結婚式を挙げさせて下さいましな。」

「ウーン左様か。坊さんとはお前も物好きだな、本當に一生添ひ遂げる氣かい？」

「父さまは何を仰有るの。私が天から授かつた愛する愛する良人では御座いませんか。一生どころか、二世も三世も夫婦ですわ——ねえあなたや……」

人前も憚らず三藏に抱きついてキッスでもしさうな勢ひ。國王の方では王女と年が二十も違ふ上に、旅塵に塗れた薄汚い坊主を世嗣にしたくはないが、可愛い一人娘が、非常な執心振りですから仕方がありません。

「お前さへその氣なら、わしは何も彼はいひはせんよ。ぢや明後日は日もいいから、式を擧げることにしよう——これ和尚殿、縁あつて親子となる譯ぢや。わしもそのうち隠居して國を譲るによつて、随分娘を可愛がりながら、政治をみておくれ。」

「陛下、どうかそれはゆるして下さいませ。私はただあそこを通りかかつて、偶然毬にあつた

だけなのです。それに私は出家の身分で、これから經文を求めに行かねばなりませんから、どうしても妻帯は出来ません。何としても結婚は厭です、厭で御座います。」

「なに？ 娘をやり、國をくれてやるといふのに、何が不足で厭だと申すのぢや、この没分曉漢奴が……強つて厭だと申すなら、この場で斬殺してしまふぞ！」

喜んで承知するものとはかり思つてゐたのを、頭から斷られたので、大變な怒りやうだ。三藏はここで殺されては、實も葉もないから、せつば詰つての一時免れ。

「ぢやあ貰ひます、戴きます。雷音寺へは、私の代りに三人の門弟を遣はしますから、旅館に使をやつて、ここへ呼び寄せて下さいませ。」

國王もこれを聞いて機嫌が直り、すぐ迎への使をやりました。

一方悟空は一人で宿屋へ歸つて來ると、八戒は不審顔。

「兄貴、お前一人で、お師匠様を何處に置いて來たんだい？」

「八戒、驚くなよ。お師匠様はな、お姫様の毬にあたつて、お婿様になることにきまり、一緒に車に乗つて宮中においでになつたよ。どうだ羨ましいだらう。」

「さうかい、それは惜しいことをした！ さうと知つたら俺が行つて毬にあたるんだつけ。似合ひの夫婦が出來て、兄貴や悟淨もおれが引立ててやるから、仕合せになるのだつたになア。」

「ハハハハ、お前のその面を見たら、お姫様は吃驚して氣絶なさるよ。」

「さう安く見てもらふめいぜ。顔こそ綺麗な方ぢやアないが、これでも味のいいところがあるんだからね。」

「馬鹿も休み休みいへよ。それよりか、今にお師匠様のお迎ひが来るに違ひがないから、荷物の支度でもして置け。」

「もうお師匠様は荷物なんぞの用があるもんか。一度夫婦の楽しみをお知りになれば、何も難澁して旅などおいでになりはしないよ。」

三人で下らぬ話をしてゐるところへ、國王からお召しの使が來たので、打連れ立つて宮中に参向しました。

三人を引見した國王は、揃ひも揃つて奇怪な容貌なのに心中驚いたが、さりげない様子で話しかけられる。

「もう聞いたであらうが、今度お身たちの師匠が娘の婚にきまり、明後日婚禮を致す筈ぢや。就てはお身たちが代りになつて、その經文とやらを取りに行つて貰ひたいのだが、どうぢやの？」

「承知致しました。お師匠様さへそれで宜しければ、きつと私どもだけで行つて参ります。」

「早速の承諾忝けない、婿殿も左様申して居るのぢや。では二三日ここで休養して、それから出立してくりやれ。」

三人を奥の間に案内して、さまざまにもてなします。

その夜、人が寢靜まつた頃を見計らひ、三藏はオドオドした顔で悟空の許へやつて來た。

「悟空、實に困つてしまつた。國王はどうしても婿になれ、ならなげや殺すといふのぢや。どうかして逃れる方法はないだらうか。」

「さうで御座いますな。私の考へでは、どうもここに居る方の王女が怪しいと思ひますから、明後日の御婚禮に参列して、眞偽を見きはめることに致しませう。しかし萬一こつちの方が眞物だつたらどう遊ばす？ このままここに居据つて、面白可笑しく一生をお過しになるのも、洒落てるでは御座いませんかね。」

「馬鹿なことを申すな。お前はわしを嘲弄しようといふのか。そんな失禮を申すなら、緊箍呪を唱へて苦しめてやるぞッ。」

「お師匠様、冗談ですよ、冗談ですよ。あの呪文だけは、どうぞ勸辨して下さい。——明後日は何とでもしてきつとお救ひ致しますから……」

三藏もやつと安心して寢に就きましたが、翌日もまた前の日に優るやうな御馳走なので、八戒などは非常な喜びやう。溜飲が起るのも構はず、盛んにバクついてゐます。

三 王女實は兎の怪

かくていよいよ婚禮の當日となれば、王女は朝から風呂に入つてテカテカに磨き立て、腰元ども二三十人の手傳ひで、第一公式の衣裳を着けましたから、全く見る人を惱殺するやうな美しさ。殊に親の國王などは、眼を細くして大恐悦です。

「おおお、立派にお化粧が出来たね。いよいよこれから式を擧げるばかりだが、何でもお前が、かうして欲しいと思ふことがあつたら、遠慮なくいつておくれ。どんなことでも叶へてやるよ。」
「お父さま、私はまだ見ないんですけれども、腰元たちの噂を聞くと、ハズについて来た三人の男は、とても恐ろしい顔だといふでは御座いませんか。そんな男は見るのも厭で御座いますから早くどこかへ追ッ拂つて下さいましな。」

「いいともいいとも。實はわしも彼奴等が嫌ひなのぢや。では早速雷音寺へ出立させて、その後で式を擧げることに致さう。」

國王はすぐその足で接見所に到り、三藏及び三人の従者を召し出された。

「三人はこれからすぐに出立して、經文を求めに行つて參れ。婿殿はここに残つて、近いうちに國王の位に登せる筈だから、お前たちは決して心配致すことはないぞ。」

「ハイ、では仰せに従ひ、早速出立することに致しませう——お師匠様、左様なら……」

アツサリ立上つて宮中を辭し去らうとする様子に、三藏驚いてひそかに三人の袖を捉へましたが、悟空は眼ばたきで、大丈夫ですといふやうな暗號をしたので、やむなくそのまま居残つてゐ

ます。

悟空は一旦旅館に歸つて、例の分身法を行ひ、一本の毛を自分そつくりの姿に變じさせ、本人は小さな蜜蜂に變りました。

「俺はちよつとお師匠様を見てくるから、お前たちはここに待つてゐてくれ。若し亭主が來ても、いい加減にあしらつて、決してこの俺には話しかけさせてくれんなよ。」

ブーンと宮中に飛んで行つて見ると、大廣間には婚禮の準備全く整ひ、大官重臣綺羅星の如くに居列んだ中を、王女は大勢の腰元にかしづかれて、さも嬉しさうに入つてくる。續いて三藏が群臣に押しやられるやうにして入場し、肩を並べて正面の座に着きましたが、これはまた戦々兢兢として、生きた色ありません。

悟空は師匠が富貴色慾を嫌ふのを見て、心中大に感じ入りながら、瞞を定めて仔細に王女の面態を覗ふと、果して妖氣紛々たるものがあります。さてはと心に打ちうなづき、三藏の耳の側に飛んで行つて、

「お師匠様、あの王女は確かに妖怪に違ひありません。私がやつ付けますから、驚きなさいますな。」

と囁くや否や、矢庭に本相に返つて王女の袂をつかまへた。

「この化物め！ 貴様は榮華を盡しながら、何が不足で、和尚様の童貞を汚さうとするのだ。早

く正體を現はしやがれツ。」

忽然と出現した毛むくちやらの男が、破鐘のやうな聲で怒鳴つたから、滿堂大混亂。腰元どもは悲鳴をあげて逃げようとしたが、皆腰が抜けてその場にへたばつてしまひ、フーフー吐息をついてゐるばかりです。

見現はされた賢王女は、バツと悟空の手を振り拂ひ、窓から逃げ出して、空中に飛び上つたのを、悟空も同じく雲を呼んで、逃さじと追ひかける。王女は懐劍を抜き放つて、暫く戦つてゐたが、やがて身を翻へして一團の金光と變り、悟空が眩しがつて、眼をパチパチしてゐる暇に、逸早く南方に逃げ、とある山中へ姿を隠してしまつた。

悟空は餘り長追ひもせず、一旦宮中に歸つて見ると、呆氣にとられてゐた國王は、眞つ先きに訊ねました

「悟空殿、あれは全くの妖怪でありましたか。」

「さうです、金箔付の妖怪で御座います。山蔭に隠れて姿を見失ひましたが、若しひそかに宮中に戻つて来て、皆様に仇をしいしまいかと思ひ、一先づ歸つて参りました。」

「それは千萬忝けない——しかしあれが妖怪とすれば、本當の王女は何處に居りませうか。」

「それはあの、妖怪を捉まへてしまへば、自然と判明致しませう。私はこれから退治に行つて参りますから、宿に居る八戒と悟淨をお召出しになつて、宮中の守護をおいひつけなされませ。」

再びさつきの山に行つて彼方此方と探し廻るうち、頂上の岩穴に髪振り亂したままの姿で、隠れてゐるのを見付けた。

「コラ妖怪、この如意棒を喰はぬうち、早く正體を現はしてしまへ。」

「ほざくな山猿、よくも貴様は俺の邪魔をして、唐の和尚をものにしそこねさせたな。その怨み思ひ知れツ。」

棍棒をとつて鋭く打つてかかれれば、悟空は如意棒で渡り合ひ、兩々祕術を盡して戦ふこと數十分。妖怪もなかなか手練の曲者で、勝敗いづれとも見えわかぬうち、たちまち、空中から朗かな聲が聞えました。

「悟空大聖、しばらくその戦ひを止めてはくれまいか——」

悟空はその聲のした方角を仰ぎ見ると、月の神様太陰皇君が、嫦娥姫御同道で雲の中に立つてゐられます。

「おお、お月様で御座いましたか。どうして私をお止めになるのです？」

「外でもないが、その妖怪はわしの廣寒宮で餅搗役をしてゐた鬼、持つてゐる棍棒は杵なのぢや。いつぞや鎖を抜けて下界へ逃げて來たのだが、今日大難に遇ふことが判り、命を助けてやらうと思つて参つたのだから、わしの顔に免じてどうぞ勸辨してたもれ。」

「さうで御座いましたか。外ならぬあなた様の仰せですから、勘辨してもやりませうが、彼奴は天竺國王のお姫様の風をして、私のお師匠様を誑かさうとした不良少女で御座いますよ。」

「それにも實は譯があるのだ。あの天竺の王女は、以前わしの召使だつたが、二十年前にあることの間違ひから、餅搗の鬼を打殺したため、その罪によつて下界に追ひやられ、天竺國皇后の腹を借りて、その娘に生れ代つたのぢや。一方ではその鬼の忘れ形見が親の讎を討たうとして、前申したやうに下界に降り、王女を苦しめたのだが、圖に乗り過ぎて三藏法師を良人にしようなどとしたのは、甚だ以て宜しくない。しかしまだ、三藏をどうしたといふ譯でもなく、いはば未遂罪だから、今度のところは大局に見てはくれまいかの。」

「さういふ因縁がありますのなら、私には別に異議は御座いません。どうぞ御自由にお連れ歸り下さいませ。」

「早速の承諾忝けない——これ鬼公や、早く本相に還つて、わしの前に參らぬか。」

妖怪は先刻太陰皇君が見えた時から、地べたに顔を付けて這ひつくばつてゐましたが、かう聲をかけられると同時に、眞つ白な鬼に變りビヨンビヨン皇君の前へ跳んで行きます。嫦娥姫はこれを金の鎖で繋ぎ止め、悟空に一禮して、父の皇君とともに月宮殿として歸つて行かれました。いい鹽梅に餅搗き鬼が戻つたので、後世のお伽噺にも、依然この鬼が現はれて來る譯なのです。

悟空は急いで皇居に歸り、ことの仔細と、布金寺に本物の王女が居る話を告げましたので、國

王は早速家來を遣はして王女を呼び迎ひ、親子一年振りの對面に、一時打ち濕つた宮中は一陽來復、さんざめく喜びです。國王は悔悟と感謝のしるしに、畫工に命じて三藏等四人の像を描かせ、これを神殿に掲げて、救國の主とあがめ祭り、連日宴を張つて下にも置かぬ歡待ぶり。四五日の後出發の際には、國王の御車に三藏を乗せ、群臣とともに十數里先きまで見送つた上、名残を惜んで別れました。

寇長者の家

一 萬僧歡迎の高札

それから半月餘りの後、銅臺府の都にはいりますと、大富豪と覺しき宏莊な邸宅の前に「萬僧不阻」即ち「和尚さん大歡迎」といふ立札があるのを認めて、一夜の宿を求めました。主人の老翁は自分で出て来て、何くれとなく一行をもてなし、殊に遙々と唐の國から經文を授かりに來た由を聞いて、非常な喜びです。

「よくお立寄り下さいました。私は寇大寬と申す者ですが、土地の人達は寇長者などと呼んできます。四十の時から一萬人の御出家に供養を志さしまして、今日まで二十四年の間九千九百九十六人に齋を差上げ、もう四人で満願といふところへ、あなた方のやうな有徳の高僧が見えたことは、何といふ仕合せで御座いませう。ここから大雷音寺までは僅か八百里足らずですから、どうぞ御寛りなすつた上でお立ち下さいませ——コレコレお前たちもこつちへ來て、唐の和尚様にお目にかかるがいい。」

老夫人や寇梁寇棟といふ二人の息子を呼んで、一行を禮拜させる。若い息子たちは遠い唐國か

らの客と聞いて、好奇の眼を見張らずにはゐません。

「私たちが地理書で讀んだところによれば、この西牛賀州から、唐國のある南贍部州まで十萬七八千里とありましたが、一體ここまでいらつしやるのに、何年おかかりになりました？」

「我々は途中數へ切れぬほど難儀に遇つて、いろいろと手間取りましたので、指折り數へて見ますと、最早出立してから十四年目になるので御座います。」

「それは大變で御座いましたなあ——今日はお疲れで御座いませうから、ゆつくりお休みになつて、明日でもまた途中のお話を聞かせて下さいませ。」

「宜しう御座いますとも——ぢや御主人、今日はこれで失禮させていただきます。」

翌日もその翌日も家を舉げて至らざるなき歡待。一行は禮心から、この家の佛事に携はつたり、旅行談をして聞かせたりしますから、長者親子も何よりの客とあがめて、容易に放してくれません。ついウカウカと四五日を過しましたが、心せく三藏は七日目の朝、寇長者に向つて暇を乞ひました。

「御好意に甘えて、便々と滯留致しましたが、今日は是非お暇しようと思ひます。長々の御厄介、本當に有難う御座いました。」

「それはいけません。和尚様はどうしてそんなにお急ぎになるのです。何かお氣に障つたことで

も御座いましたか？」

「どう致しまして、私たちは何とお禮申してよいか、その言葉に苦しんでゐるくらゐです。ただ唐國を出立のみぎり三年で歸ると國王に申して参りましたのに、もう十四年もかかりましたから、一日も早く行つて来ようと思ふので御座います。どうぞ今日は出立させて下さいませ。」

三藏が強ひて辭退するのを、傍で聞いてゐた八戒は、堪り兼ねてシヤシヤリ出た。

「あのやうに仰有つて下さるものを、お師匠様も頑固過ぎるぢや御座んせんか。こちらはこの通りの大家ですもの、半年や一年居つたつてちつとも困りやしませんよ。何も無理矢理辭退して、また冷飯を貰つて歩くには當らないと思ひますがね……」

「黙れ阿呆、何といふたはけたことを申すのぢや。お前は食ふことばかり考へて、經文を求めに行くことを忘れたのか。それならわし一人で行くから、お前たちはここに残つてゐるがいい。」

從者一同コミにして叱り付けられたから、悟空までコワイ顔をして八戒を睨み付ける。八戒は不平滿々、ブツブツ言ひながら引き下つたところへ、今度は老夫人と二人の息子が出て来て三藏を引き留めます。

「この子たちも、もつとお話を承りたいと申してますし、私も未來のためにもつと功德を積ませていただきたく御座いますから、どうぞもう五六日御逗留なすつて下さい。私の臍繰はみなお布施に差上げますから。」

しかし三藏は飽まで辭退するので、氣短な婆さん、たうとう怒り出してしまつた。

「人の好意を無にするのにも、程といふものがありますよ。もう何も申しませんから勝手になさ

501

プイと横を向いたつきり口も利きません。長者は押宥めて、

「婆さん、和尚様も御用があるんだから、さう怒りなさんなよ——ではかう致しませう。せめて今日一日だけ延ばして下さつて、御出立は明朝になさい。さうすれば親類縁者を狩り集めて、盛大なお見送りを致しませう。」

三藏もこれまでは斷り切れない。是非なく一晩泊つて翌朝いよいよ別れる段になりますと、長者は果して親戚や近所の人を集めて、送別の大宴會を催し、樂隊を先頭に「送唐僧之西遊」だの「三藏大和尚萬歳」などといふ旗を立てて、賑々しく見送りに押し出します。まるで以前によくあつた金持の息子が入營でもする時見たい。町には見物が大勢出て、寇長者の豪勢ぶりに驚かないものはありません。

二 強盜團を膺懲

十里ばかり行つてから、三藏は一同と別れを告げて、ひたすら道を急ぐうちに、晝過ぎから曇り出した空は、たうとう大雨になつたので、一行は路傍に荒れ果てた祠堂を見付け、一夜をここ

に過すこととなりました。八戒は寝るところもないやうな、堂内を見廻して不平タラタラです。「寇長者こうちやうがあんなに引止めるのを、無理矢理に立つていらしたから、こんなヒドイ目に遇ふんちやありませんか。いふことを聞いて、あの家に居さへすれば、今頃はおいしいお茶おちゃで、ホカホカした飯を食つてゐられるものを、ここでは飯をもらふところもないし、寝ようたつて寒くて腹られやしませんぜ。」

「八戒、お前はまだわしを怨んでゐるのか、たはけた奴ぢや。諺ことわざにも長安好しちやうあんこうしと雖もいへせ久しく戀ふるの家にあらずといふことがある。經文を授かつて唐へ歸つたならば、皇帝に申上げて、大膳職にある御馳走を、お前の腹の皮が裂けるまで食はせてやるから、もう愚圖々々申すな。」
八戒も仕方がないから、膝小僧を抱いて黙然と坐つてゐるうち、ダラシのない顔をして、そのまま寢入つてしまひました。

さて、この銅臺府どうたいふに三十人ばかりで組んで居る不良青年團がりましたが、この日、寇長者が三藏を送る際の豪奢ごうしゃぶりを見て、急に悪心を起し、その夜風雨に乗じて寇家へ集團強盜に押入つた。家人一同驚いて八方に逃げ隠れたが、年はとつても氣丈な長者、獨り居残つて彼等の顔を見極めようとしたため、却つて賊に蹴殺されたのは飛んだ災難で、不良團はありとあらゆる金銀財寶を奪ひ取り、風の如くに逃げ去つてしまひました。

やがてそれぞれ隠れたところから出て來た家の人たちは、この有様を見てただ泣くばかり。中に老夫人は豪奢を盡して三藏等を送つたために、泥棒に見込まれてこんな大難に遇つたのだと、ただ一心に三藏を怨み、いい加減な作り事をして子供等に告げます。

「泥棒は今朝立つた和尚たちぢや。早く警察に訴へて、彼奴等を捕まへておくれ。」

「え、泥棒はあの和尚ですと？ 母上はどうしてそれを御存じですか。」

「わしは縁の下に隠れて覗いてゐたから、何も彼も知つてゐる。炬火たいまつを持つたのは三藏、槍を下げたのは八戒、金銀を取つたのは悟浄で、お父さんを蹴殺したのはあの悟空奴ぢや。」

「さうで御座いましたか、あのやうな高恩を受けたのにも拘らず、金銀を奪ひ取るのみか、父上まで殺害するとは返す返すも憎くい奴。遠くは行きますまい、これから直ぐに訴へ出て、きつと讐いらいを討つて貰ひます。」

早速その筋に出頭し、そのおもむきを訴へたので、警視廳は近來の大事件として、非番巡查までも總動員、約二百名の警官が、足拵らへも凜々しく、犯人の追跡に向ひました。

かかることがあつたとは夢知らぬ一行、祠堂に一夜を明して翌朝出發しましたが、一里ばかり行つたところで、路傍の藪蔭から、突然大勢の強盜が躍り出した。

「やい、貴様等は寇長者こうちやうの家に泊つてゐた坊主だらう。貰つて來た路用を殘らず置いて行けばよし、四の五のぬかすとぶつた斬つてしまふぞッ。」

えらさうに脅かしたまではよかつたが、悟空はかくと見るよりむにやむにや定身の呪文を唱へたので、一同刀を振上げたまま硬くなつた様はさながら下手な活人畫のやう。悟空にやり笑つて一掴みの毛を抜き悠々これを繩に變へ、八戒悟淨の三人で、残らず縛り上げたうへ、呪文を元に返したから、強盗連は呆れ返つて、眼をばちくりするばかりです。

「さまあ見ろ。貴様たちはこれまでうんと悪事を働いたであらう。眞直に白状せぬと、この棒で脛にしてやるぞ！」

「ど、どうぞ御勘辨下さいませ——私たちは皆あの町の者で御座いますが、道樂の擧句金に困つて、ふと悪心を起し、昨晚寇長者の屋敷へ押入り、初めて強盗を開業したばかりです。今あなた方の路用まで奪ひ取らうと慾張りしましたため、罰が當つてこんな目に遇つちまつたので、これからきつと改心致しますから、どうぞ命だけはお助け下さいませ。」

側らでこれを聞いてゐた三藏は、驚いて悟空に注意しました。

「悟空、それは恩人の家で大變なことだ。その盗んだ品を取り上げて、お返しするやうに取り圖らつてくれ。」

「御尤もです——これ貴様たちが盗んで來たものを、皆ここへ出せ。さうしたら脛にするのはゆるしてやらう。」

「はいはい、命さへお助け下されば、盗んだものは愚か、私どもの着物から禪でも何でも、洗

ひ浚ひ差上げますで御座いませう。」

「誰が貴様たちの下帯など要るもんか。さあその品物は何處にあるのだ？」

泥棒の指示により、藪蔭に隠して置いたおびただしい金銀財寶を運び出して、白馬に荷付けした上、約束通り繩を解いてやると、泥棒どもは蜘蛛の子を散らすやうに、八方に逃げ去つてしまつた。

三 一行に殺人の嫌疑

三藏等は圖らずも恩返しの出來たことを喜び、馬を挽いて銅臺府へ引返さうとしてゐるところへ、追跡の警官隊が駈付けて來て一行の姿を認めるや、それつといひさま押取り圍んで、有無をいはさず四人を搦め上げた。三藏はおろおろ聲——

「悟空よ、わしたちは、なんにも悪いことをせぬのに、どうして縛られるのだ？ 早くなんとかしてくれ。」

「御心配なさることはありません。このお巡りさんたちは、きつと私等を泥棒と間違へて縛つたんです。抵抗してぶち破るのは何でもありませんが、それも殺生ですから、溫和しく警察へ引つ張られて行つて、その上で充分申開きを致しませう。」

一行は彼等のなすがままに任せ、銅臺府の警視廳へ引つ立てられる。兇賊逮捕の報に喜んだ警

視總監は、威猛高になつて自ら三藏達を取調べます。

「こら、その方どもは和尚の風を装つてゐるが、實は夜稼ぎの強盗だらう。昨晚、寇長者の家に押し込み金銀を奪つた上、長者を惨殺したのは、その方たちに違ひはあるまい。さあ、包まずに白状しろッ。」

「いや、私どもは何も存じません。昨日まで数日の間、寇長者の家で厄介にはなりましたが、賊に入つた人を殺したのなどは、微塵覚えのないことで御座います。」

「偽りを申すな。賊にはいつたことのない者が、何で寇家の財寶を持つてゐたのだ。あのやうに物的證據がある上、長者の奥さんは確かに賊はその方どもだと申してゐるぞ。」

「滅相もないこと。私どもは圖らずも寇家にはいつた賊に出會ひましたから、せめてもの御恩報じと、彼等を追散らし、贖品を取上げて返しに參らうとするところを、間違はれて警官方に捕まつたのです。私どもが唐國の和尚に相違ないといふ證據は、この旅券を御覽になれば判ることです。どうぞ仔細に御檢分下さい。」

「ふうむ、如何にもこれは通過諸國の査照を受けた旅券に相違はない。が然し、何故その方たちは、大勢の賊を追放す程の力がありながら、一人なりとも捕まへて置いて、證據にはしなかつたのだ？ それも致さず財寶ばかり持つて居たとあつては、賊でないといふ反證にならぬではないか。兎に角、拘留して置いて、ゆつくり取調べにやならん——これこれ係りの者ッ、この四人を

留置場にぶち込んで置け！」

罪なくして縲紲の辱しめを受け、異郷の獄窓に繋がれる身となつた三藏は、悲しき口惜しさに、ただ咽び泣くばかりです。しかし悟空に八戒は至つて平氣なもの。

「御師匠様、明日はきつと嫌疑が晴れるでせうから、さうお歎きなさいませぬ。それにここは案外静かですから、まあ安心して御寛りおやすみなさいませ。」

「さうだ、兄貴のいふ通りだ。昨夜のあばら屋よりは、すつと上等ですし、それにここなら、あまり美味しくないにしても、辨當にや有り付けますよ。」

三藏もこれに力を付けられて、漸く涙をとどめ、やがて夜も更けたのでうとうと眠りに就かれた様子。悟空はこれを見るや、きつと胸中に思案を定め、一疋の羽蟻に變じて、長者の家の方へ飛んで行きました。

ここに寇家の門前に、一軒の豆腐屋がありました。朝の早いのは天竺も日本も同じと見えて、この家の老夫婦は暗いうちから起き出で、婆さんは釜の下を焚き、爺さんは豆を挽きながら、いろいろ世間話をしてゐます。

「寇長者も、金もあれば子供もある何不足ない身分だつたのに、全く氣の毒な目に遇はれたのう。確か俺より五つばかり年下で、昔は同様貧乏だつたが、あの奥様と一緒になつてから、運がよくなられたんだ——時にあの奥様の若い頃のことを、おぬしは知つてゐるかい。」

「それは老爺さん、知つてゐるどころかいな。あの奥様は子供の時分穿針さんといふ名で、わし等の遊び仲間だつたわいの。お父さんの張旺といふ人が、この界限一番の金持だつたが、死んで世嗣がなかつたために、その財産がみんな長者殿の物になつたのだよ。」

「さうした譯だつたのかい。それにしても一萬人もの御出家に供養をして、えらい善根を積まれたのに、あんな非業な死に方をなされるとは、前世に大きな罪でもあつてぢやらうかのう。」

「本當にお氣の毒な御最期をなされたものぢや。南無阿彌陀佛々々々々々々。」

「南無まいだ、南無まいだ。」

羽蟻の悟空は、逐一老夫婦の噂話を聞いてから、長者の家に行つて見ますと、老母と二人の息子が棺の前に額づいて、嘔り泣きながら通夜をしてゐます。悟空これを見済まして、こつそり棺の上にとまり、いきなりエヘン！と大きな咳拂ひをしたから、三人は吃驚した。兄弟はその場に打伏し、ぶるぶる慄へてゐるばかりだつたが、老母はやつと氣を取り直して、

「旦那様、あなたは生き返つていらつたのですか……」

「いやいや、さうではない。わしは閻魔王のいひつけでお前たちを責めに參つたのぢや。これ穿針、お前は どうして偽りをいひ立て、人を罪に陥したのだ？」

「私の幼な名をお呼びになるからは、正しく旦那様ぢや——もし旦那様、私はそんなことを致し

た覚えは御座いせんが。」

「嘘を申すなッ！ あの唐から來た和尚たちは、わしを殺した強盜を捕まへ、盗まれた財寶を取り返して下さつた大恩人なのに、お前はいい加減な訴へを致して、罪もない和尚たちを苦しめてゐるではないか。閻魔王はこれを知られて、ひどくお怒りになり、お前たちを冥土に連れて來いと、きついお達しなのだ——」

長者そつくりの聲色を使つて、厳しく誣告を責め立てるので、胸に覚えのある老母は、心から恐れ入つてしまひ、蒼くなつてぶるぶる慄へてゐるばかりです。悟空はここで語勢一轉——

「しかし、わしもお前を冥土へ連れて行くのは可哀さうぢやによつて、早くその筋に出頭して告訴の取下げを致せ。さうしたなら、わしが閻魔王にお願ひして、お前等の命乞ひを致してやらうと思ふがどうぢや。」

「はいはい、きつとさう致します。唐の和尚たちを泥棒と思ひ違へて訴へましたのは、みんな私の過ちで御座います。夜が明けましたら、早速警視廳へ願ひ出ますから、どうぞ命を助けるやうにして下さいませ。」

「左様か。ではわしは再び冥土へ歸るによつて、一刻も早く左様取圖らふがよいぞ——ゆめゆめ違ふること勿れ。」

かう氣取つた聲がした後は、最早聞として何の音も致しません。

四 閻魔王に頼む

時は早や東雲の曉の頃、そつと寇家を飛出した悟空は、方向を變へて警視廳に行つて見ると、重大事件勃發に緊張してゐる總監は、早くも登廳して、部下とともに何やら評議してゐます。悟空心に思ふやう、かう大勢居るところへ羽蟻の姿で現はれたのでは面白くない。一つ魂のでんぐり返る程脅かしてやれ、といふ譯で、忽ち空中に飛上るや、まるで奈良の大佛を立上らせたやうな大男に代り、お午のサイレン見たいな太い聲で、吼えるが如く怒鳴りました。

「やい、ボリスどもよつく聞け！ 我こそは天上玉帝の御使浪々遊神なり。汝等眼あれども視る明なく、唐僧に無實の罪を着せて留置するとは奇怪至極、速かに釋放致さばよし、愚圖々々致さば、この家諸共、汝等を踏み潰してしまふぞツ。」

總監等一同はその聲に驚いて窓から空中を見上げると、五つ抱へもあらうと思はれる太い毛脛で、警視廳の屋根を踏んまへて居ますから大狼狽。平素の威嚴も何も打忘れ、悲鳴をあげて歎願します。

「あやまります、あやまります。あの生き佛様を捕まへたのは、全く我々の過ちでした。唯今直ぐ放免致しますから、どうぞそのお御足を動かさないでゐて下さい。」

「その言葉に相違はないな。若し少しでも遅れると、またやつて来て踏み殺すぞ。」

充分脅した上で毛脛を引込め、羽蟻になつて監房に飛歸り、何食はぬ顔をして澄し込んでゐる。蒼くなつた總監は、直ぐ釋放させようとしてゐるところへ、寇長者の息子たちが息せき切つて駆け付け、前夜の次第を語つて告訴取下を願ひ出ました。これを聞いた廳員一同益々靈異に驚き、急いで三藏等を引出して總監室に招じ入れ、御機嫌をとるために、親子井だの餅菓子だのといろいろ御馳走して、平謝りにあやまります。

前々から中つ腹でたまらなかつた八戒は、これぐらゐでは堪能致しません。

「なーんだ、こんなケチな井ぐらゐで、自分たちの大縮尻を許して貰はうといふのか。苟くも我々出家が、窃盜殺人の悪名を着せられては、このままでは歸られねえ。さあ何とこれを補償してくれるんだ——ねい、お師匠様だつて御同感で御座いませう。」

「まあさう荒立てるな。もともと寇家の訴へから、警察が我々を捕まへたんだから、これから長者の家に行つて見て、一つには恩人の靈を弔らひ、二つには何故我々を盜賊と訴へたかを問訊さうではないか。あの通り總監も陳謝してゐられるから、もう勘辨してお上げ。」

八戒も長者の家に行けば、もつともつと美味しい物が食べられると思ふもんだから、納得して怒りを納め、廳員の最敬禮裡に、四人は辭して寇家を訪問しました。

梁、棟兄弟達は、三藏達が門前に見たのを認めて慇懃に出で迎ひ、奥座敷に招じ入れた上、

しきりに詫入りましたが、最初から一行に好意を持たなかつた老母は、佛頂面をして碌にもものいひません。これを見て怒つたのは悟空です。

「この糞婆奴！嘘をいつて我々を罪に陥さうとしながら、知らん顔をしてけつかる。さういふことなら、長者の魂に本當の下手人を聞いて来て、うんと取つちめてやるから、その時吠え面かき腐るなよ」

いふが早いか、いづこへか飛び去つたから、さすがの老母もどうなることかと驚き恐れて、ぶるぶる慄へてゐます。

悟空は十萬億土もたた一飛び、冥土總督府に閻魔王を訪問して、今度の不法拘留事件を詳細に物語り、長者の壽命を延ばして貰ふやう懇ろに頼み込む。閻魔王も外ならぬ舊友の懇望ですから、即座に快諾を與へ、事務員に命じて靈魂陳列室から長者の魂が入つてゐる櫃を取出させ、悟空に返してくれました。これで見ると靈魂不滅説なんか閻魔の應に行きさへすれや、譯なく證明が出来ます。

何しろ魂が手に入つたんだから、もう占めたもの。悟空大喜びで閻ちゃんに禮を述べ、急いで寇家に立歸り、棺の蓋をあけて長者の口へ件の櫃を當てがひますと、その効驗は酸素吸入どころの騒ぎではなく、今まで死んでゐた長者はむくむく起き上りました。

「これはこれは、和尚様もいらしてゐて下さいましたか。私は強盜に蹴殺されて、お別れした晩

から冥土に行つてゐましたが、先刻、悟空殿が見えて私の魂を御無心になつてゐたと思ふうち、この通り生き返ることが出来たのです。命の親と申していいか、再生の恩人といつていいか、全くお禮の申上げやうも御座いません。」

四人の足下にひれ伏して、心から感謝の言葉を述べる。

悟空はここで、老母の悪計から一行が囚はれの身になつたことを、逐一いひ聞かせたので、長者は猛烈な憤慨。婆の首を斬つて詫びのしるしにしようとしてまで教團きましたが、三藏の執りなしで漸く納まり、そこへ警視廳の手を経て、盜難の金品全部が戻つて來ましたから、重ね重ねの喜びです。

長者は先日中にも優る饗宴を張つて一行をもてなし、警視總監その他政府の大官も宴に参列して、謝恩、慰安、歡送迎及び再生祝賀等の意味まで加はり、銅臺府あつて以來の大盛會。翌日出立の際は例の如く樂隊、旗幟を先頭に官民數千人で二十里餘りを見送り、行を壯んにしました。

大雷音寺到着

一 凌雲渡の危難

一行が日一日と靈山に近づくにつれて、樹木花草の類まで何となく清々しく、通りかかる家々では喜んで齋を供養し、方々から看經の聲が洩れ聞えるのも、さすがに佛地とうなづかれます。やがて五六日の後には靈山の裾野に着きましたので、三藏は溪流に沐浴して五體を淨め、足どりも軽く進んで行きますと、忽ち洋々たる大河の前に立ちました。見ればその邊には渡船の影も見えず、「凌雲橋」と標柱のある唯一本の獨木橋がかかつてゐるばかり。名は同じでも上野公園のとは違ひ、二三里もあるかと思ふやうな細くて長い橋です。

悟空は、體操の教官が梁木でも渡るやうに、平氣で向う側へ越えましたが、三藏は勿論、八戒、悟淨まで意氣地なくも尻込みして、渡らうとしません。

「おうい八戒、何をまごまごしてゐるのだ？ お師匠様のお手を引いて、早く此方へ渡つて来いよ。」

「だつて兄貴、俺はとても恐くて渡れはしない。仕方がないから雲に乗つて飛んで行くよ。」

「雲に乗つて来ちや佛には成れないんだ。是非橋を渡つて来い。」

「そんなことなら、俺は佛に成らずに歸つちまふからいいや。」

「はははは、困つた奴だな。ちや仕方がないから俺が引返すとしよう。」

いくらいつても駄目なので、悟空は再び東岸に引返し、三藏を間に、皆で手を引き合つてそろりそろりと渡り始めました。

何しろ三里もあらうといふ長い橋を、ここは蟲の這ふやうに渡つて行くんだから、その間だるつこいことつたらない。悟空は胸中いらいらしてゐるところへ、ちやうど一艘の舟が橋の下を通りかかつたので、三藏喜んで飛び乗らうとしたはずみに、足を滑らして川の中にどぶん。泳ぎの心得がないからぶくぶく沈んで行く。

三人驚いて船の中に飛び込み、船頭も一緒になつて漸く三藏を引き上げると、不思議やそつくりな土左衛門が、川下へ流れて行くから三藏はびつくりした。

「おやおやおや、あれはわしの死骸だ！ 一體これはどうしたことだ。」

「ははははは、あれはお師匠様の肉身で、凡俗に離脱し、佛になられた證據で御座いますよ。」

「左様か、それは有難いことぢや。南無阿彌陀佛々々々々々々々々々々。」

自分で自分の土左衛門に回向してゐるのだから世話はない。八戒と悟空は手を拍つて可笑しがつてゐるうち、舟は無事向う岸に著き、船頭は棹を執つて再び中流に漕出したと見えだが、忽ち佛

體に變じ彩雲に乗じて山上に飛んで行かれた。これなん靈山の式部官を勤むる接引佛祖でしたから、三藏はその有難さに頓首九拜するのみです。

一同は身も心も浮々と、勇み勇んで山を登り行く程に、間もなく大雷音寺の眞下に着きました。見上ぐれば峨々たる峻峰、その光景を原文を辿つて叙して見ると――

「頂は霄漢の中を摩し、根は須彌の脈に接す。巧峯排列、怪石參差し、懸崖の下に瑤草琪花句ひ、曲徑の傍に紫芝香蕙薫す。仙猿桃林に入つて果を摘み、白鶴松に棲んで枝頭に立つ。彩鳳日に向つて天下の瑞を鳴き、青鸞風を迎へて世間の稀を舞ふ――」

(ああ、草疲れた。ところどころ中略にして先きを急ぎます。)

「また見る黄森々たる金瓦は鴛鴦を疊むに似、明晃々たる花磚は瑪瑙を鋪けるが如し。東に一行西に一行、盡く蕊宮珠闕、南に一帶北に一帶、都て寶閣珍樓なり。天王殿上霞光を放ち、護法堂前紫籐を噴く。正にこれ地天の別を知らず、雲閑にして晝長きを覺ゆ。紅塵到らず諸緣絶し、萬劫虧くる無き大法堂。」

――といふ次第、まるでバツキングダム宮殿、ヴェルサイユ宮殿や日光の東照宮などを一緒に集めてグランド・キャノン公園にでも持つて行つたやうな風だから、宏大なもんです。

三藏は、いよいよ目的のゴールにはいつた嬉しさ喜ばしさに、我を忘れて眺め入つてゐるところへ大勢の和尙や尼さんが迎へに來ました。

「さあさあ、早くおいでになつて、お釋迦様にお目にかかりなさいませ。」

皆で手を引いて一の門に來ると、出迎へた二大金剛が四人を迎引して二の門の四大金剛に引繼ぎ、更に二の門から三の門と順々に唐僧の到着を報じ、大雄殿へと招じ入れる。釋迦如來も大變な御機嫌で、八菩薩、四金剛、五百阿羅漢、三千揭諦、十一大曜、十八伽藍の諸佛を従へさせられ、唐僧一行を御引見になります。三藏恭しく旅券を捧げて、

「私は東土大唐國の佛弟子玄奘三藏と申します者。皇帝の命により衆生濟度の眞經を授かりに参つたもので御座います、願はくば御恵みを持ちまして、經文をお授け下さいませ。」

と申し上げれば、如來は御聲朗らかに、

「善哉々々。汝等の本國は土地が廣く人こそ大勢だが、心邪まなる者多く、永世阿鼻地獄に墮ちて、哀れにも苦難を嘗めるものが少なくない。偶々孔子が現はれて仁義禮智の道を説き、歴代の帝王が徒流絞斬等の刑罰を定めて人民に望んだけれども、愚昧無智の輩には殆ど効果がなかつ

たのぢや。これも偏へに正しい教へを示す書籍がなかつたためだから、今汝の功勞を嘉して、余が藏する法藏論藏經藏の經文計三十五部一萬五千一百四十四卷を悉く汝にとらせ遣はす。持歸つてその教へを唐國にひろめ、癡愚の凡夫を徳化するやうに致せよ——これ阿難に迦葉、お前たちは唐僧に齋を與へてから、あの寶藏へ案内致せ。」

「は、はあッ——」

一行を食堂に案内していろいろと馳走致します。この料理類も俗世界の物とは違つて、單に美味なばかりでなく、一箸毎に精神が爽かになるやうな珍品揃ひ。食事が終ると、二尊者が先きに立つて、いよいよ目的の經文庫へ導き入れました。

二 庫番が賄賂強要

庫の中には五彩の霞が漲り、その間に金銀珠玉を鑲めた經櫃が、一々經卷の名を記した紙を貼付けてあつて、整然と列べられてある。三藏は嬉しさに暫くは茫然として見入つてゐる時、二尊者はにやにやしなながら手を差し延べました。

「へへへへへ、あなたは唐の國から來たんだから、何か我々にお土産を持つて來たらうね。」

「え、お土産ですつて？ それはどうも、誠に申譯がありませんが、餘り遠いところから参りましたので、何も持つて來ませんでした。」

「さうかい——手ぶらで來た人へ、ただで大事な經文をやつちや、後で我々は餓死しなくちやならんがね。」

土産のあてが外れたので、二人は甚だ不機嫌なやうです。短氣な悟空はカツとなつて、

「何だと、この瀆職野郎奴！ ぢやお釋迦様にお話して、直接に經文を授けていただくわい。」

「ははははは、何もさう眞つ赤になつて騒ぐなよ。誰もやらないといふんぢやないから、さつさと持つて行くがわい。」

「ふふん、黙つてゐたつて持つて行くわい。」

ふんふんしながら、八戒悟淨とともに經文を引出して白馬に負はせ、再び釋迦如來の前に出て厚く御禮を述べた上、佛達にも別れを告げて、いそいそ歸國の途に就きました。

*

一行は十四年間の艱難辛苦の末、遂に最後の目的を達したので、勇みに勇んで道を急ぎましたが、實は阿難迦葉に渡されたのは、無字の經といつて見たところは、全くの白紙。上位の佛たちでなければ讀み得ない經文で、兩尊者が悟空に罵られた腹癒せに、こんな惡戯をしたのです。

經藏の監督役である燃燈老佛といふ老爺さんは、先刻ちやんとこれを見ておましたから、氣の毒でなりません。

「可哀さうに、無字の經とは知らずに持つて行つたが、あのまま唐へ歸つてそれと判つたら、さ

ぞ力を落すだらう。何とか知らせてやりたいものだ。」

と下役の白雄尊者に旨を含めて、一行を追ひかけさせました。

白雄は委細領承。秒速七十メートルばかりの烈風を起して、これに打ち乗り、瞬く間に追付いて天上から眺めると、三蔵はじめ四人とも欣々然として歩いてゐる。先頭で足の早い悟空が、やや後の三人と離れた頃を見すました白雄、いきなり空中から手を伸して、馬の背から經の包を取上げるや、ばらばらに振解いて地上に投げ捨て、素早く逃去つてしまつたから、後で氣付いた悟空はどうすることも出来ません。

三蔵は突然の椿事に、驚き且つ悲しんで涕淚滂沱。

「この極樂にも、こんな悪いことをする者が居つたのか。」

と皆で落ち散つた經文を拾ひ集めてゐるうち、ふと見れば一字半點の跡もない白紙と判つたから、二度吃驚です。

「や、や、これは何も書いてない白紙ぢや、こんなものを、はるばる唐へ持つて歸つたとて、ただ笑はれるばかりぢや——悟空、これは何としたことであらうのう。」

「お師匠様、これはかうで御座いませう。あの阿難と迦葉の慾張奴、土産を貰はぬ腹癪せに、わざとこんな白紙をくれたのに違ひありません。どの途引返して行つて、お釋迦様へ賄賂強要を訴へ出ようぢや御座いませんか。」

八戒も側から賛成して、

「全く兄貴のいふ通りだ。アンナ、カトウな奴はないよ。」

この急場に際して、下らん駄洒落を飛ばしてゐる。

悟空が眞つ先に立つて再び大雷音寺に引返し、ぶりぶりしながら釋迦如來の前に伺候した。

「お釋迦様、私どもは十四年間千辛萬苦を重ねて、お經をいただきに参りましたのに、あの阿難と迦葉が、土産がないのを怒つて、こんな字の無い經文をくれたのです。あんな者がここに居るといふのは、極樂淨土の恥辱ぢや御座いませんか。抑も公務員としてコンミツションを要求する漬職罪は、刑法百九十七條の明文によつて、三年以下の懲役或は……」

「これこれ悟空、さう騒ぎ立てることはない。あの二人が土産を要求したことも何も、わしはよく知つて居るのぢや。が、あの經文はさう軽々しくは渡せぬので、お前たちの熱心さを試して見るため故意と手敷をかけたのであらう。あの白本は實は無字の眞經で、却つて尊いのぢやが、お前たちにはまだまだ讀めまいから、改めて字のある方を遣はすと致さう。」

再び二尊者に命じて、お經庫に案内させましたが、矢張り前と同じく土産物を請求します。しかし三蔵は今度は要領を心得てゐますから、先年出立の際、皇帝から賜はつて來た紫金の鉢を取り出しました。

「先刻も申し上げた通り、別にお土産としては用意して來ませんでした。これは唐の國王から下

された鉢で、途中齋を求める折に用ひた品で御座います。どうぞお土産のしるしまでに、これをお納めなすつて下さいませ。」

二人は心中、三藏の熱意に感じ入り、字の有る經文を出してくれましたので、馬の背に餘つた分は八戒が背負ひ、一同晴々した顔で釋迦如來の前に伺候する。如來は降龍伏虎の兩羅漢に聲を打たせて、再び天上の佛達を召集になり、正式の授受を遊ばされます。何しろ三千諸佛、三千揭諦、四金剛、八菩薩、八百比丘僧、大衆優婆塞、比丘尼、優婆夷等靈山中のあらゆる佛陀聖僧が一堂に集まつたのだから、瑞光彩霞は四邊に搖曳き、樂の音は劉啞と響いて、何ともいへぬ有難い光景。命によつて二尊者が讀上げた經文の目録は、

涅槃經、菩薩經、虛空藏經、首楞嚴經、恩意經大集、決定經、寶藏經、華嚴經、禮真如經、大般若經、大光明經、未曾有經、維摩經、三論別經、金剛經、正法論經、佛本行經、五龍經、菩薩戒經、大集經、摩竭經、法華經、瑜迦經、寶常經、西天論經、僧祇經、佛國雜經、起信論經、大智度經、寶威經、本闍經、正律文經、大孔雀經、雜識論經、俱舍論經、

合計三十五部五千四十八卷といふ莫大なものです。如來は嚴かなお聲で、

「この經文の功德は眞に廣大無邊ぢや。天下四大部州の天文、地理、人物、鳥獸、花木のことよ

り、禮儀、道德等何一つとして載せてないものはない。お前が南贍部州に歸つたならば、齋戒沐浴してこれを開き、一切衆生に示してその徳に與からせるがいい。」

と仰せられたので、三藏は有難涙に搔暮れながら、幾度も佛恩を謝して歸國の途に就きました。今度こそ字の有る經を授かつたのですから、間違はありますまい。

三 受難八十一度目

一行が山門を出ると間もなく、觀音菩薩は何か思ひ出した様子で、釋迦如來に話しかけられた。「私が先年仰せによりまして、唐國に赴き、經文を受ける僧を選んだので御座いますが、今日その目的が終りましたので、心から本懐に存じます。ただ年數を數へて見ますのに、今日まで十四年、即ち五千四十日で、八日少ないために經文の卷數とは合ひませんので御座います。如何で御座いませうか、あと八日の間に四人をここまで歸つて來させ、卷數と日數とを合せるやうに致しましては？」

日歩の金を借りてるんぢやないから、日數なんかどうでもよささうなもんだが、佛様方はこんなことが大切と見えて、如來もすぐ賛成なされた。

「如何にもそれは宜しからう——では金剛が參つて東土へ見送つた上、八日のうちにここへ連れ戻つて來い。」

片道に十四年かかったところを、往復八日で連れて来るやうとのことですから、愚圖々々しては居れません。金剛は直ぐ跡追ひかけて行つて、一行にこの趣を告げ、雲に飛び乗つて道案内に立ちます。悟空等三人はもとより、白馬も龍の化身ですから雲は自由、三藏だけでもちもぢしてゐるのを、悟空が手を取つてひよいと雲の上に引き上げると、既に佛果を得て居ますから、以前とは違ひ軽々と飛び乗りが出来る。そこで遠見の利く悟空が、方位係を承はり、フォールスピードをかけて東の方へと戻つしぐら――

一方、観音菩薩は、自分が推薦した三藏が經文受取に成功したので、我がことのやうな喜びやう。御殿に歸つてからも、三藏の道中を守護した神々を召されて内祝ひをなされながら、三藏の遭難の話などを聞いてゐられました。その數を集めて見るとちやうど八十週になります。「ふうむ、八十度とは随分苦勞をしたものぢや。しかし佛の教へに九々眞に歸すといふ語があるが、八十一にはまだ一難だけ足りない。その數に合はせるやう、お前たちが追ひかけて行つて、最後の一修行を積ませて来ておくれ。」

観音様は餘程勘定を合はせるのがお好きと見えて、またこんなことをいひ出された。

神々は命に従ひ、雲に馬力をかけて追跡したが、向うも急いでゐるからなかなか追付かない。一晝夜飛行の後漸く誘導の金剛を見つけ、こつそり菩薩の仰せを傳へますと、金剛は點頭いていきなり三藏達が乗つてゐる雲の端を引張りましたから、中心を失つた四人は、白馬諸共スツテ

ンコロリと地の上に落つこつた。

しかし身體が出来てゐるので、幸ひ誰にも怪我こそなかつたが、この突然の墜落には吃驚せざるを得ません。

「これはどうしたといふんだらう。餘り我々の雲が早いから、金剛君が休憩しようとして、我々を落つことしたのかしらん？」

「うん、さうかも知れないぞ。したが一體ここは何處だらうな。」

「おやおや、大きな川がある。何だか見たことのあるやうな川だな。」

見たことがある筈、先年靈感大王に謀られて氷の中に落された通天河です。三藏は眞つ先に當時のことを思ひ出して、

「いつぞや向う河岸の陳澄兄弟の家に泊つて、二人の子供を救つてやつたことがあつたではないか。その時は白い龜が現はれて我々を渡してくれたが、この西河岸には船もないし、どうして渡つたらいいだらうの。」

「さうで御座いますなあ……」

相談をかけられて三人は、安全な渡河方法につき首を捻つてゐるところへ、川の中から大聲で呼びかけるものがある。

「皆さん、こつちへいらつしやいませ。」

四人が驚いて振返ると、水がもくもく盛り上つて、浮び出て来たのは先年の大きな白龜です。「お久しう御座います。私はあの後今日まで、和尚様のお歸りになるのをお待ちして居りました。さあさあ私の背中に乗つかつて、川をお渡りなさいませ。」

「左様であつたか。先年も世話になつて、またまた御苦勞をかけるのは氣の毒ぢやな。」
「何のわけもないことで御座います、御遠慮なさいませな。」

四人は喜んで馬と一緒に大龜の背中に乗れば、龜は足を開いて威勢よく泳ぎ出し、僅かの間に對岸近くに來た時、振向いて三藏に聞きました

「和尚様、貴方が如來様にお遇ひになつたら、私が何時畜生界を脱けて人間になれるかを、伺つていただくやうお願いしましたつけが、如來様の御返事はどうで御座いましたらう？」

三藏はかう問はれてハタと答へに詰つた。實は天竺で釋迦如來にお目にかかつた時、經文を貰ふことにのみ氣が取られて、白龜との約束を忘れて來たのだから、何と返す言葉もなく、顔を赤くして、下俯向いてゐられるばかりです。

龜の方では、さては忘れて聞いて來なかつたのだなと氣付き、かつと怒つてそのまま水底に沈んでしまつたから、三藏は忽ちあつぷあつぷ。しかし以前とは違ひ、凡體ではなくなつて居られるから、直ぐに溺れるやうなことがなかつたので、三人がかりで抱き上げ、漸く東岸に泳ぎ付き

ました。

何分三藏の方に違約の落度があるのだから、誰を怨みやうもありません。水びたしになつた經包みを解きひろげて日に干し、一同は日向ぼつこをしながら、着物の乾くのを待つてゐましたが、忽ち一陣の旋風が起つて、經文を捲き上げようとなりました。四人はそれを吹き飛ばされまいとして、彼方此方に抑へ廻り、大變な騒動です。

やがて風もやや熄んだ頃、通りかかつた漁師が、一行の顔を見知つてゐて、このことを陳家に告げましたので、兄弟は取るものを取敢ず、大勢の召使ひをつれて迎へに參りました。

「和尚様何をなすつていらつしやるのです。どうして私の家へお寄り下さらないのですか。さあさあ早くおいでになつてお休み下さいませ。」

頻りに勧めますので、三藏も好意もだし難く、經卷を取纏めて立上つたが、今のどさくさで佛本行經の二三巻が、どこかへ吹き飛ばされ、どうしても見付かりません。

「悟空よ、とんだ粗相をしてしまつた。それもこれも皆わしの不徳からで、下さつた釋迦如來に對しても、御申譯のないことだ。」

「お師匠様、何もさうくよくよなさることはありませんよ。物事は總て充分なのがよくないんです。少しばかり足りないところに、却つて妙味があるぢや御座いませんか。」

「うん——それもさうだな。」

悟空の哲學に慰められて、氣を取り直し、陳家に迎へられてその邸に行きますと、先年命を救つてやつた子供の一種金と陳關係は、立派に成長して十六七の少年少女になつて居り、その他の家人も總出で、珍味佳肴を取揃へ心からの歡待を致します。しかし一行は天竺の御馳走を食つてから餘り下界の物を欲しくなくなり、八戒君すら僅か一杯半で箸を置いて「どうしたんだらう、俺の胃は弱くなつたのかしら……」と不思議がつてゐるのは、滑稽至極。

村人は活佛様の御來臨だと、代る代る禮拜に來り、引留められてその夜はたうとう泊ることになつたが、考へて見るとさう便々としてゐる譯には行かない。

「悟空、どう致したものでやらう。こんなところに長く留められては、間違ひが起きないとも限らぬと思ふが……」

「御尤もで御座います。ちや、いつか慈雲寺でやつたやうに夜逃げと出かせませう。」

寢てゐる八戒、悟淨を呼び起して、その支度をいひつける。八戒も以前とは違つて直ぐ起き上り、いそいそ準備を整へ、一同でこつそり家を脱け出した時、空中から案内役の金剛が、

「晝間はひどい目に遇つてお氣の毒でしたね。さあ、早く私についておいでなさい。」と聲をかけます。自分で雲から落つこととして置きながら、知らん顔して體裁のいいことを言つてゐる。三藏はこれで觀音様の御註文の通り九々の難を濟したわけで、一同再び雲に飛び乗り、

フルスピードで東に向ひました。

四 十四年目に歸國

かくて飛行一晝夜半ばかりの後、はや大唐の首都長安城の近くに來ました。十四年ぶりに見る懐しい郷土、三藏の眼に涙が宿るのも決して無理ぢやありません。金剛は後振向いて、

「いよいよ長安に着きました。しかし我々が姿を見せるのは宜しくないから、法師一人で經文を献上しておいでなさい。我々はここで待つてゐて、御用の濟み次第御一緒に天竺に歸ることに致しませうねえ悟空君、さうしてくれ給へな。」

「だつてお師匠様一人でお纏を背負つたり、馬を挽いたりは出來ませんよ。私たちもついて行きますから、どうか暫く待つてゐて下さいな。」

「しかし、觀音様から八日のうちに歸つて來いと、いひ渡されて來たのに、もう五日も經つてゐるからなあ。それに八戒君が行つちやア、御馳走に未練を残したりして、早切り上げは危ないもんだからね。」

「じよ、冗談言つちやいけませんよ。私だつて成佛したいんですもの、誰が食ひ物なんか心を取られるもんですか、大丈夫ですから暫くの間待つてゐて下さいな。」

靈山を拜して以來、八戒の面目全く一新した觀があります。金剛も安心して承諾しましたので、

一行は雲を下りて王城に向ひました。

願れば貞觀十三年九月十二日、太宗皇帝三藏を天竺に遣はされてから、その後同十六年に土木局に命じて城内に壯大な經樓を建立させ、年々ここに行幸あり、この日も恰度龍駕を擡げて、樓上に居られました。西の方から薰風が吹いて來たと思ふ間もなく、三藏一行が雲に乗つてやつて來るのが見えました。太宗は驚き且つ喜び、群臣を兩側に列べて待つてゐられるところへ、一行は静々と雲を下り、地上に跪いて最敬禮を致します。

太宗はそれから一同を従へて、宮城に還御になり、早速正殿に於いて經文捧呈の式が行はれることになる。三藏は三人の弟子に命じて經卷を御前に運び出させ、西遊の途中通過の各國で查照を受けた旅券とともに、恭しく太宗に献上致しました。

「十四年前勅命を奉じて、天竺に向ひ、唯今恙なく歸朝致しまして御座います。持ち歸つた經文三十五部五千四十八卷は、即ちこれで御座います。」

「それはそれはえらい御苦勞であつたぞ。わしが大乗の眞經を得ようと思ひ立つたことから、飛んだ骨折をかけたのう。」

御機嫌いとも麗はしく、近侍に命じて經卷を經樓に收めさせた上、旅券を披いて御覽になると、最初の寶象國から金平府に至る、各國元首の御印が盡く押捺してあります。

「ホウ、これだけ多くの國々を通過したのか。して靈山まではどれくらゐの道程であつたか？」

「全部で十萬八千里と承はつて居ります。」

「道中定めていろいろな難に遇つたであらう。話して聞かせよ。」

三藏は途中の幾百の遭難から、天竺大雷音寺に於ける仔細を物語り、なほ三人の門弟及び白馬の來歴や功勞などを残る限なく奏上しましたので、太宗は勿論列びゐる文武百官、皆感嘆せぬ者があります。

「その三人の門弟達にも會ひたいものぢや。ここへよべ。」

「イヤ、彼等は野育ちのもので、御前に出まして失禮があつては恐れ入ります。どうぞおゆるし下さいませ。」

「イヤイヤ決して苦しうない。誰かある、ここへ三人を案内して參れ。」

侍従の誘導で、三人は帝に謁を賜はり、なほ盛宴を張つて一行に天盃を賜ひ、親しくその勞を慰められます。一同は無上の光榮に浴し、やがて御前を辭して、三藏が住持であつた洪福寺に引取りました。

洪福寺には以前から一本の大きな松の木がありました。先年三藏が天竺に赴く際、この松の枝が東に向つたならば、わしが歸つて來るのだと思へといつて出立したのでした。それから十四年、寺の僧侶たちは毎日のやうに、木を見上げて今日か明日かと待侘びてゐましたが、この朝松の枝が悉く東を指し、間もなく歸着の知らせがありましたので、皆々非常な喜びです。

一同捻り鉢巻で寺内を拭き浄めるやら、庭を掃除するやらしてから、上等の法衣に着替へて門前に待つてゐるところへ、大勢の役人に送られて四人がやつて来た。

「お目出たう御座います。」

「お歸りなさいませ。」

「御機嫌宜しう御座います。」

「お住持さま萬歳ッ。」

「なんまいだぶ、なんまいだぶ。」

いろいろのことをいひながら、擔ぎ上げるやうにして、奥殿に招じ入れる。三藏も、久方振りに舊門下に遇つて、さすがに嬉しくてなりません。互ひに旅中のこと、留守中のことを語り合ひ、深更に及んで三人とともに寢に就きました。八戒等も、すでに佛果を得てゐる身として、齋を食つたり、下らぬ騒ぎをするやうなことなく、顔のマツイのは仕方がないが、その坐作進退は、實に堂々たるものです。

五 皆佛菩薩に化す

翌朝三藏等は再び参内致しますと、眞經を得た喜びに溢れてゐる太宗は、今日御菩提寺の鴈塔寺では是非講義をしてくれるやうにとの御説です。歸りを急ぐ三藏もこれは否む譯には行きません。

「では、仰せに従ひ、ホンの少しだけ説教致しませう——しかし、陛下が今後、眞經の教義を流布遊ばす折には、寫本をおひろめ下さいまして、持ち歸りました原本は、大切におしまひ置き下さいませよ。」

「如何にも、お身の申す通りに致すであらう。」

四人は太宗の御車に従つて、鴈塔寺に到れば、この高僧の説教を聴聞しようとして、集つた僧侶大衆實に數千人、まるで西瓜の出盛りに、神田の青果市場にでも行つたやうな光景です。

三藏、眞經を手にしてやをら講壇に登り、朗々と讀誦を始めた時、空中から大音で、金剛の呼ぶ聲がした。

「三藏殿、もう日限がない。講義はやめにして、早く天竺へ行きませう。」

これを聞いた三藏は、經文を差置いて、太宗に向ひ、

「お開きの通り、靈山に歸る日限が、もう切迫して居ります。お名残惜しうは御座いますが、どうぞおゆるし下さつて、お暇を賜はりますやうに……」

といふや否や、ヒラリと中空に舞ひ上れば、壇下に待つてゐた三人も、白馬諸共一齊に雲に乗り、金剛に従つて西方に飛去りました。

太宗はじめ列座の大衆は、みんな呆氣に取られたが、追ひすがる術もないから、何とも致し方がない。目を改めて別の高僧により、眞經讀誦の大會を開き、また右筆に命じて、數千部の寫本

を言かせ、これを國內に頒ちましたから、俄然として人情に醇化の風が見えます。後世日本に傳はつて來た經文も、みんなこれが元なのですから、日蓮でも親鸞でも、味噌摺り納所でも、小僧でも、總て三藏に感謝せねばなりません。

三藏等は道を急いで八日の期限内に雷音寺に着きましたので、釋迦如來は四人を召出し、諸佛諸菩薩侍立の上、官職親授の式が行はれます。

「三藏、汝の前世は我が門弟の金蟬子だつたが、法を経んずる罪により、魂を奪つて東土に生れ變らせたのぢや。今幸ひに我が教義に従ひ、經文を東土へ傳へた功勞は廣大である。依つて汝を高職に昇せ、旃檀功德佛と致すによつて左様心得よ。」

三藏は身に餘る面目に感泣して、頓首九拜、佛恩を拜謝し、御前を引下る。次に呼び出されたのは、隨行者中第一の功勞者たる、わが悟空君。

「悟空、汝は五百年前に天上を騒がせたので、我が法力により五行山に封じて置いたが、その後天災を終つて佛門に歸依し、三藏を護衛して、妖魔を退治しながら、無事に目的を遂げさせた。その大功に酬ゆるため、汝に鬪戰勝佛の職を與へるぞよ。」

三藏と同じ佛の位を授けられたから、華果山の石猿としてはエライ出世だ。次は八戒、モジモジしながら如來の前にかしこまつた。

「猪悟能、汝は蟠桃會の折、酒に酔うて女官に戯れ、その罪によつて畜類の腹に宿り、福陵山で

妖怪となつたものぢや。まだ色慾の氣と懶惰の風が脱け切らないやうだが、途中三藏の荷物を擔ひ、魔物と戦つた功が少くないによつて、淨壇使者菩薩を命ずる。」

これを聞いた八戒は、頗る不平さうな顔です。

「兄貴が佛になつたのに、私は淨壇使者とかいふ役にしかならないのは、ちと不公平ぢや御座いせんか。それこそ御ジョウダンでせう。」

「ははははは、それは違ふ。汝は胃袋が大きくて非常な大食と聞いたから、ちやうど恰好な職を與へるのぢや。今滿天下にわしの教を奉ずる者多く、その諸々の佛事の際に、汝が壇を淨める役となつて居れば、供へてある品々を自由に食ふことが出來て、こんな結構なことはないではないか。」

かう教はつて八戒は満足したと見え、べこべこお辭儀をして引下り、お次は沙悟淨です。

「悟淨、汝も蟠桃會で亂暴したため、流沙河に墮され、人を喰つては生きてゐたが、改心して三藏を助け、經文を求めしめた功により、金身羅漢菩薩と致し遣はす。」

更に如來は、白馬まで呼出して仰せられます。

「汝は廣晋龍王の子で、父の命に背き不孝の罪はあつたが、佛教に歸依して、三藏を乗せ、經文を本土に持ち歸り、またここに參つた勞苦は大抵ぢやなかつたと思ふ。よつて汝を天龍廣力菩薩に任ずる。」

これで四人と白馬は、みんな佛菩薩に昇せられたので、いづれも大満悦です。如來は掲諦に命じて、白馬を靈山の後ろにある化龍池に浴させると、忽ち立派な金龍と變じ、威風凛々四邊を拂つて見えます。

悟空は金龍を見て、三藏に申しました。

「白馬さへ菩薩の位を授けられて、あんな立派な本體に變つたではありませんか。私も今はお師匠様と同じやうに佛になつたんですから、もう緊箍呪で私をたしなめられることも御座いませんでせう。どうぞ、このいやな金の箍を外して下さいませ。」

「あなたの仰せられる通りぢや。まあ、頭に手をやつてごらんなさい。もう何にも嵌つては居りません。」

同格の佛となつたので、三藏の悟空に対する言葉も、自ら變つて来る。悟空は頭を撫ぜて見ますと、何時の間にか金の箍が無くなつてゐますから、大喜びです。

かくて四人は金龍とともに一齊に佛果を授かり、他の五十八の諸佛諸菩薩と同席に居列べば、天上から五彩の花片がひらひらと降りかかり、四方に嚨唳たる音楽が鳴り響いて、その美その妙言語に絶するばかり、一同合掌して、

如是等一切世界諸佛、願以此功德、莊嚴佛淨土、上報四重恩、下濟三途苦、若有見聞者、悉發菩提心、同生極樂國、盡報此、十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜——

と讀誦齊唱し、世界人類のために祈禱致します。悟空等も新米ながら立派な佛ぶり、どこに出しても恥しくない姿となりました。

三藏君萬歳、悟空君萬歳、八戒君萬歳、悟淨君萬歳、金龍君萬歳。も一つおまけに、讀者諸君萬歳——。

新 西遊記
卷下



昭和二十四年五月十五日印刷
昭和二十四年五月二十日發行

定價 百八拾圓

著者 弓 館 小 鶴

東京都世田谷區北澤一ノ一二七五

刊行者 伊 藤 禰 一

東京都千代田區神田神保町三ノ二九
不二印刷株式會社

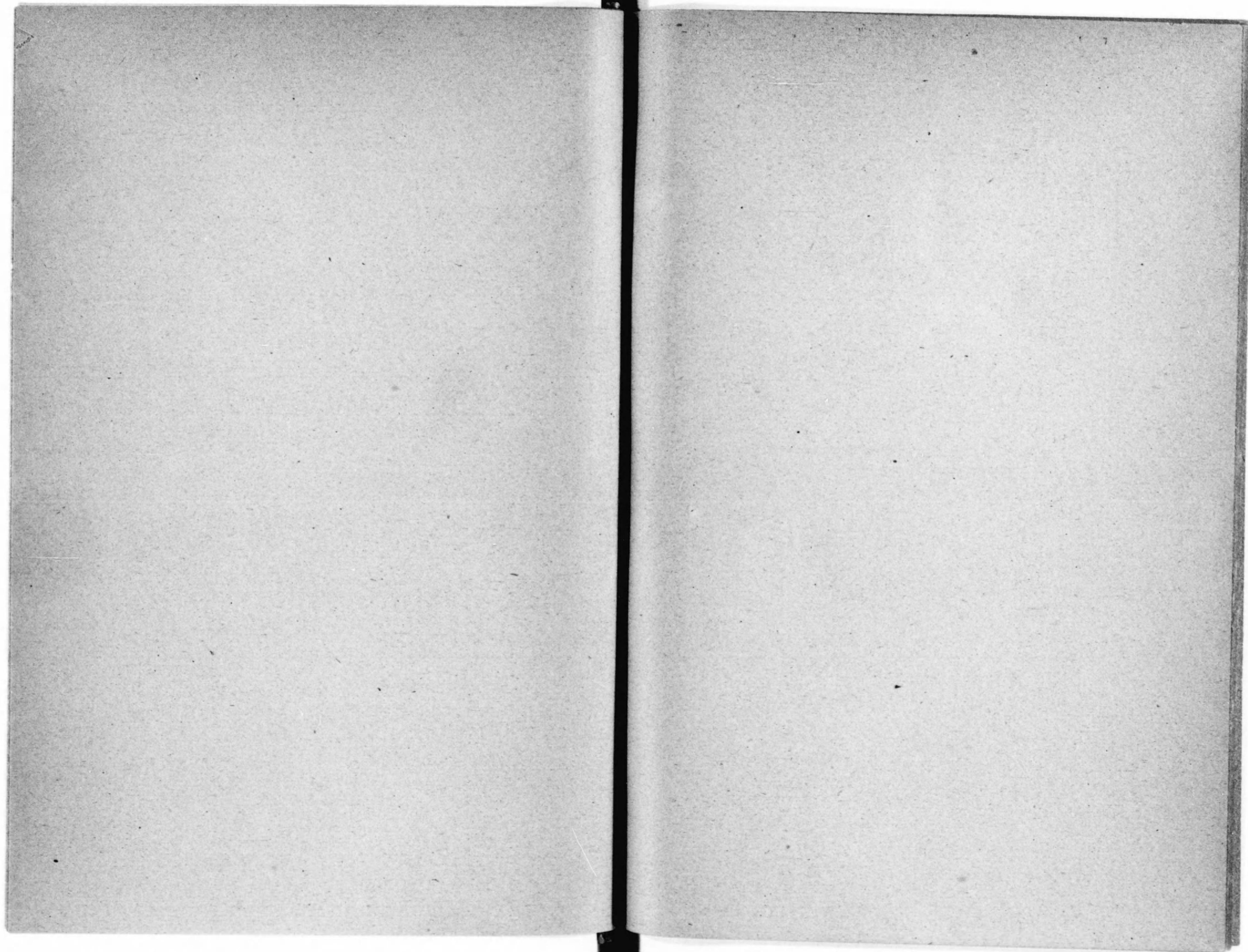
印刷者 石 ヶ 原 常 藏

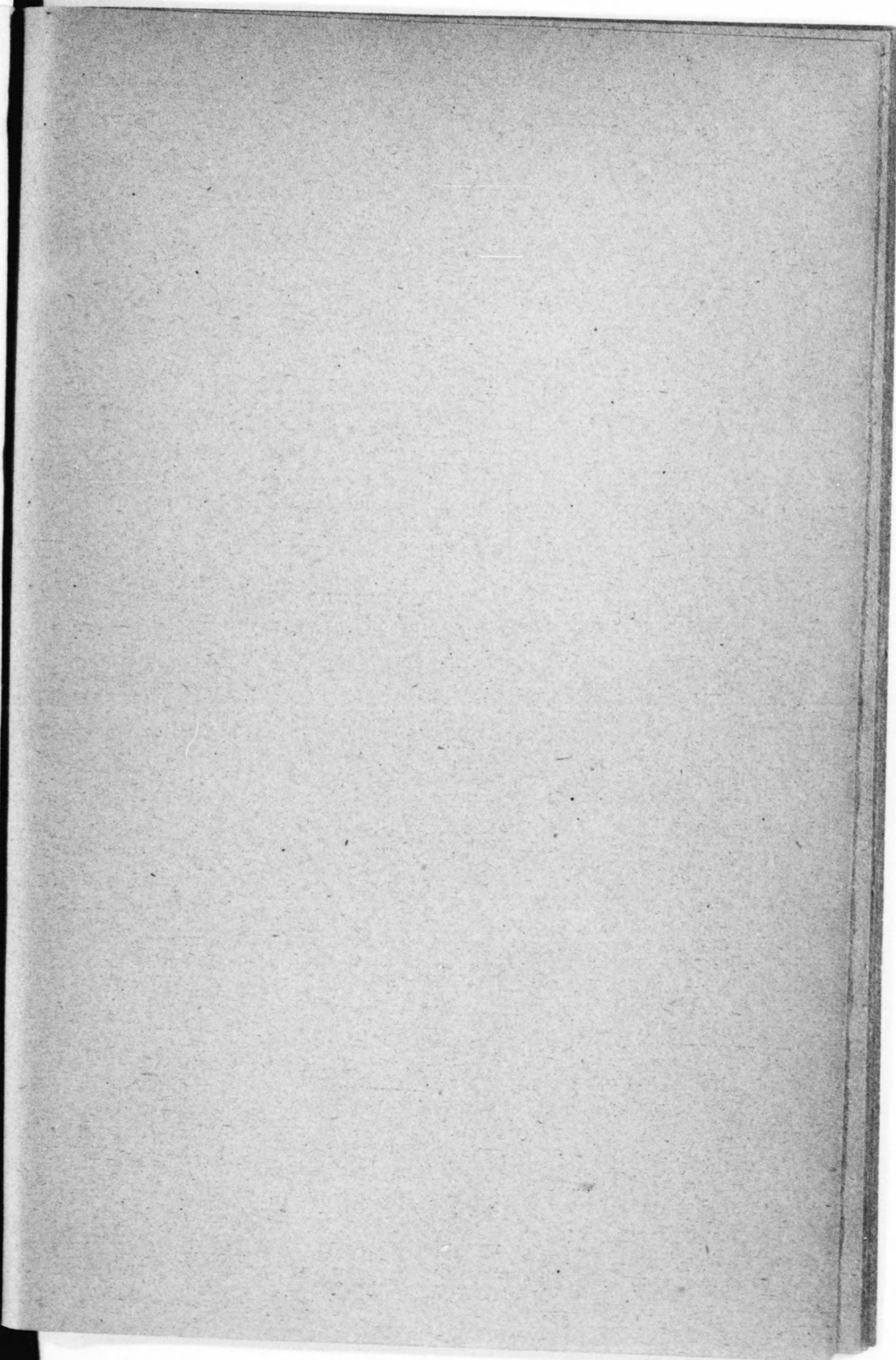
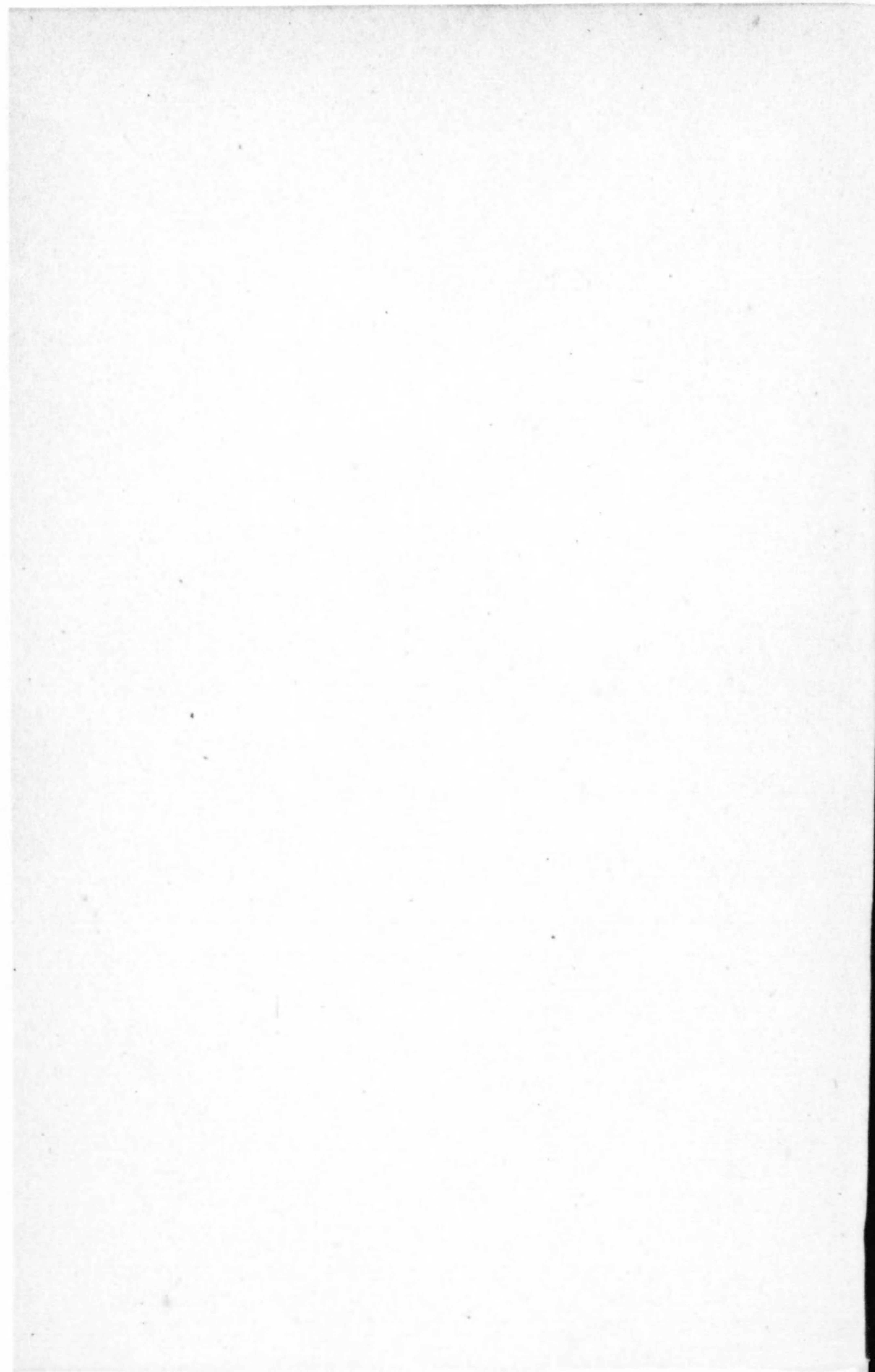
東京都世田谷區北澤一ノ一二七五

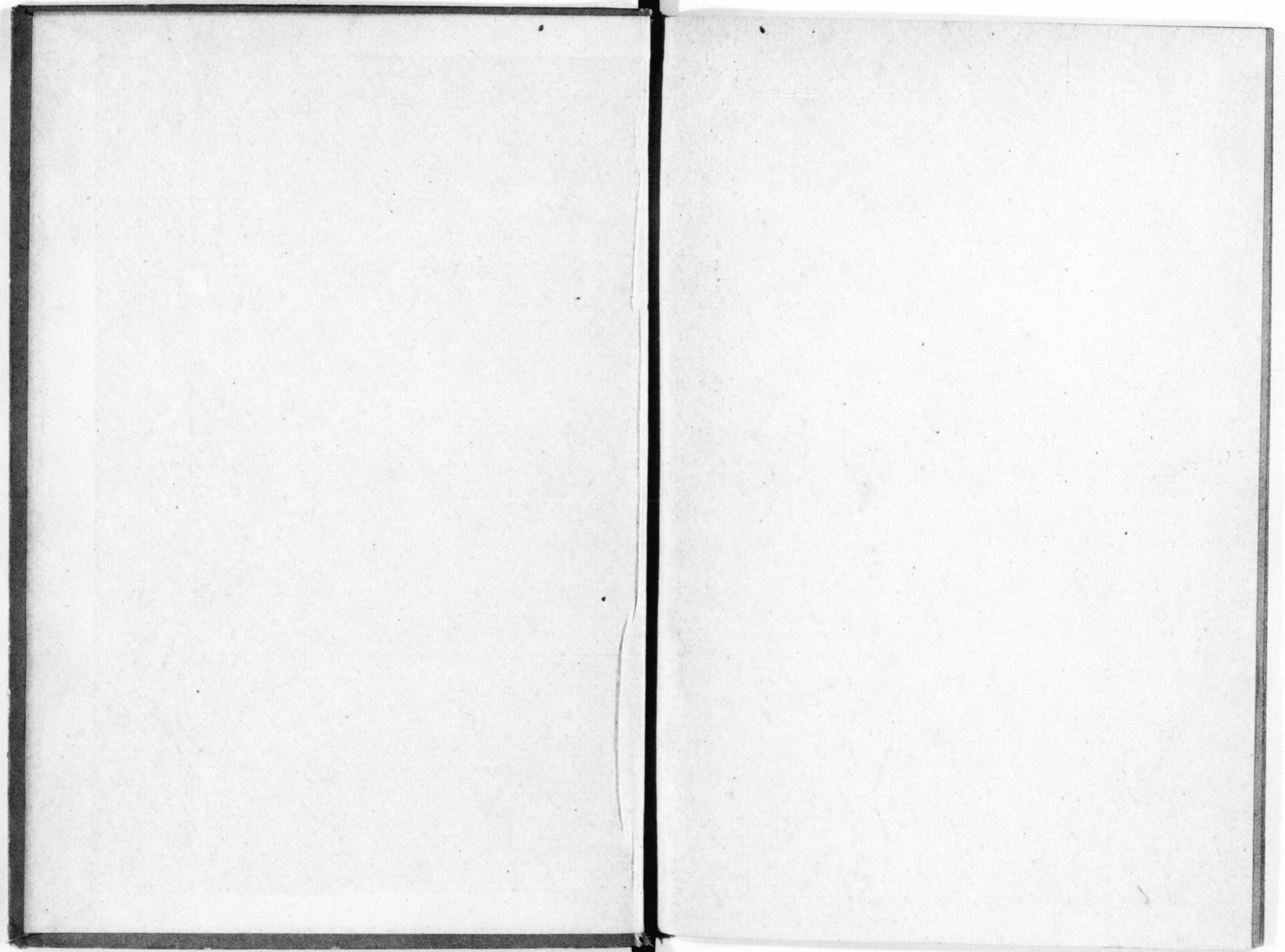
刊行所 株式會社 第一書房

電話 世田谷三四一八番
振替 東京八九五七番

(製本 大光堂製本所 黒岩 晃)







終

